
ANOTHER WORLD X

MON太やき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANOTHER WORLD X

【Nコード】

N4244F

【作者名】

MON太やき

【あらすじ】

フィギュアオタクとして日々を生きてきた多賀谷シンパチはある日、友人に呼び出しを受ける。呼び出された場所に向かうとそこには、友人と知らない者達の姿。彼らに襲われたことで、シンパチは、アンドロイドであるセラと出会い、アナザーと呼ばれる世界を変える力に目覚めることになる。

プロローグ

始めは自分で組み立てるロボットのおもちゃだった。

そのおもちゃを組み立てるまではよかった、だが、それで遊ぼうとして地面に落としてしまい、それを壊してしまった時、それは彼の身に起きた。

彼の体や心を喻えようのない歓喜が襲い、彼の身を震わせたのだ。次は、公園の砂場で山とトンネルを知らない子供が作っているのを踏みつけて壊した時、また、ゾクゾクと体が喜びに支配された。破壊することに、喜びを覚え、目に付く物は何でも壊すようになった。

きつと、自分に壊せない物など何もないのだと彼は思っていた。そんな時、彼は、公園でそれを見つける。

ギシギシ、と揺れるブランコの上に捨てられたお姫様のようなお人形。

彼は、どうしても、その人形が気になって、近づいた。

人形が顔を上げる。

そこで、どんなことを話したのかは覚えていない、でも、その日からだった、彼に人形の声が聞こえるようになったのは。

最後のその人形が放った言葉は、

『ねえ、私をもらってくれませんか』

彼はどう答えたのか、そもそも、これは記憶なのか夢なのか。

だが、どちらにせよ、意味はない。

破壊に支配された子供も、その人形も。

夢だろうと、記憶だろうと。

とつくの昔にぶっ壊れてしまった。

「……めんど」

携帯電話の画面をしばらく睨んで数秒、俺は携帯電話をベッドの

上に投げ捨てた。

着信音が鳴っていたので確認したのだが、それは、甲崎という友人からの呼び出しメールだった。

ちなみに現在時刻は深夜の二時を過ぎている。

多賀谷シンパチ、それが、俺の名前。^{たがや}

ここは、俺の住んでいるアパートで、家賃は月二万五千の1DKの部屋。

床にはゴミを詰め込んだコンビニ袋が散乱し、掃除機はいつかけたかもわからなく、パソコンを置いてあるテーブルは雑誌や漫画だらけと散らかった部屋、まあ、男の部屋なんてこんなもんだ。

だが、一角のみ、汚れなど微塵もない箇所がある。

「くはっ」

それを見て、思わず、にやけてしまう。もしも、この状況をテレビで流したら、一般視聴者の約五割は気持ちが悪い、と答えたかもしれない。

俺の視線の先、そこにあるのは、綺麗に磨かれた棚に陳列された、フィギュア・ドールコレクションの数々。

趣味？ 違う、これは、俺の人生そのものだ。

今日も、鑑賞と会話をしているうちに五時間も経ってしまった。た。

「ん〜？ そうそう、どうしようかなってね……え？ 行きなよって？」

人形に言われ、俺は仕方なく、ベッドを立ち上がる。

入居当時から付いていた洗面台の鏡に自分の顔が映る。

前髪が長すぎて片目が隠れてしまっている、目つきは恐いのではなく幽霊的な意味を込めて怖いとよく言われる。

鬱陶しい髪だが、どうでもいい、この髪だと、目つきの悪さと合わさって、赤の他人、もとい、素材・肉共も不気味がって俺に寄ってこないから楽だ。

しかし、服装はそうもいかない、季節は四月に入ったが、外はま

だ寒い。今の寝る前の薄着の状態では死んでしまう。

そこいらにかけていたコートを着ると、俺は、コレクション棚に手を振る。

「じゃあ、行ってくるね。あはは、すぐに帰ってくるよ」

そして、俺は家を出た。

甲崎信吾、（こうざきしんご）それが、俺を呼び出した男のフルネーム。

あいつの部屋で覚えているのは、ショーケースに飾られたエアガンやモデルガン、それと工具が多く、全体的に灰色を思わせる部屋だった。

所謂、ガンマニアで、正直、俺には全く理解できない世界だが、何となく、通じる場所があつて、俺の数少ない友人関係の中では、最も、関わっている人物かもしれない。

だからといって、こんな夜遅くに呼び出しされるのは、滅多になり、こういう時は大抵、断るのだが……

ただ、気になることがあつた、最近、甲崎は音信不通で、行方不明に近い状態にあつた。

学校にも一日も来ていない。甲崎はサボることが多いが、出席日数は最低限クリアしている、それに、学校をサボっても音信不通というのは初めてのことだ。

甲崎は自宅通いだ、あいつの家族は、どこか諦めている節があり、あいつが引き籠もっていても無視しているらしい、飯も金が置いてあるので、それを使っていたとか、家を出ても、親は気づいていないらしく、あいつが数日いなくても、親は不審にも思っていないだろう。

金があるとは思えない、だが、共通の友人の話では、誰かの家に泊まっているわけでもない。

だとしたら、あいつはどこにいるのか、正直、見当も付かないので無視していたが、連絡があつた以上、仕方なく、家を出てきた。それに、最近は、謎の行方不明事件が多発していることもある。

正直、明日から面倒な学校もあるから勘弁してほしいところだ。

そして、小一時間歩いてやってきたのは、俺が通う学校の北側にある人工林、人工にしては規模が大きく、よくここでサバイバルゲームをしたことがある。

だが、そんな遊び場だった林も夜だと当然、暗いし、不気味だ。

「……」

正直、入ろうかどうか迷ったが、明日にでも死体になられてでてきたら後味が悪い、生憎と、俺は恐怖とかそこらへんの感覚がぶっ壊れているため、入ろうと思えば入れる。

俺は一步、林に足を踏み入れた、

「ん……っ？」

だが、その瞬間、何か違和感を覚えて、入ってきた林の入り口を振り返るが、特に何もない、おかしい、林に入る瞬間、薄い膜のような何かがぶつかったような気がしたのだが。

「気のせいかな？」

何となく、蜘蛛の巣にぶつかった時のように気持ちが悪い、全身に何かがまとわりついているような気がしてならない。

「チツ、さっさと済ませるか」

林が育ちやすいようにするためか、ここだけ土壌の質が違う、ふわふわとして水をよく吸収しそうな、スポンジの感触。

さて、と、俺は周囲を見渡す、林の木々には、ここで遊ぶ時利用していた、いつもの待ち合わせ場所までの道順が刻まれている。

俺は記憶と、携帯電話のライトで、印を確認しながら進んでいくと、月の光が漏れて明るくなっている場所に辿り着いた。

ここが待ち合わせ場所だ、サバイバルみたいなことがしたくて、ここで、キャンプを張ったのを覚えている。

だが、そこに甲崎の姿はない。

「いねーじゃねえか」

苛立ちから頭を掻き、身近にあった木に寄りかかろうとして、

「こちら、チームB、目標を捕捉！」

そんな大声と共に、近寄ってくる数人の足音。

「何だ？ 目標……？」

呆然と立ち止まっていた俺を置いて、事態は進展する。

目の前に現れたのは、随分と安い軍人だ、と言いたくなるような、迷彩服に、深緑メット、そして、その手に握られているのは、見覚えのあるアサルトライフル、甲崎の部屋で見せられたことがあるエアガンと似ている。

そいつらは、一斉に俺を取り囲むと、ライフルの銃口をこちらに突きつけた。

月の光で、姿が露わになる、見れば、軍人などでないことは一目瞭然、太った男に、女、老人までいる始末。

だが、本物でないとわかったところで、状況は変わらない。

こいつらが、甲崎の友達で、今はサバイバルゲームをしていたと仮定するのも馬鹿馬鹿しい、誰が、好きこのんでこんな時間帯にこんなことをするか。

「動くな！」

「くそっ、何だってんだ」

俺が動こうとするのを、軍人コスプレ男が銃口を押しつけ制しようとする、どうせ、エアガンだろうが、撃たれれば痛い。

その時、林の奥から周りの連中と似たような服装の男が現れる。

だが、その顔には見覚えがあった。

「甲崎……ッ」

「よう、多賀谷」

俺の友人にして、ガンマニアの甲崎、その手には、他の連中とは違う小銃が握られている。

「こりゃあ、何の冗談だ、甲崎？ こいつらは一体、何なんだよ？」

「……多賀谷、お前、この林に入ってから、何か変わったことはないか？」

変わったこと？ あの違和感くらいしか思い付くことがない。

だが、その時に気が付いた、甲崎からも、林に入った時と同じような、違和感を覚える。

そんな俺の様子は眼中にないのか、甲崎は顎に手をやって、何かを呟いている。

「……そうか、お前も、確かに、お前ならばありえるかもしれない」
「おい、何のことだ！ とにかく、こいつらをどうにかしろ！ ゲームならお前らだけでしてくれ！」

「ゲームではない、これは実戦だ」

「はあ！ ついに頭がいかれたか、甲崎！」

瞬間——パンツと、乾いた音が林の闇に響き渡った。

音の発生源は甲崎の手に握られた小銃、小銃の銃口からは硝煙が漏れている。

一瞬、何が起きているのか、理解できなかった。

本物……、本物だ、林の中に響いた銃声も、漏れる硝煙も、それを証明している、銃口から放たれたのは、BB弾なんかじゃない。

「次は当てる、多賀谷、お前を捕縛する、大人しくしていれば殺すことはないさ、お前を呼んだのは、お前ならば仲間にしてやってもいいと思ったからだ」

「仲間？ 何のだ？」

「戦争のだ」

だから、それだけじゃ意味がわからないって！ と叫ぼうとした瞬間、俺の脳がグラリと揺れた。

「……多賀谷、『アナザー』という単語に心当たりは？」

「アナ、ザー？」

アナザー、その単語は聞き覚えがあった、何かのサイトで見たことがあるはずだ、だが、こんな状況で冷静に思い出せるかよ。

「知らないのか、まあいい、おい、捕縛しろ」

「イエッサー」

甲崎の命令に従って、一番近くにいた男が近づいてくる。

くそっ、何なんだ、と苛立つも、苛立ちとは裏腹に、自分のものではないかのように体が動かない、動いてくれない。

男の手が伸びてくる、この先、どうなるのか、仲間にするとか言

っていた、葉漬けとか、洗脳なんて単語が脳裏を過ぎる。

ああ、こいつは俺の世界を支配しようとしている。

そう考えた瞬間、頭が真っ白になった、そして、その真っ白な中に、浮かび上がってきたのは、

「うぜえ」

純粋な怒りと憎悪。

「？ 多賀谷？」

俺の中で、何かが蠢く、そいつは暴れていて、

「俺を、変えようと……支配しようとすんじゃないやねえよ！」

俺の叫びに呼応するように、

「ッ、何だ？」

それは、起きた。

「た、隊長、これは！」

地震でも起きたかのように、地面が猛々しく揺れ、その場にいた全員がバランスを崩す。

だが、どう考えても、それは地震などではなかった、何故なら、

（揺れているのは、甲崎達だけだ）

そう、俺の立っている場所は揺れてなどいない、甲崎達の立っている場所だけが、古い橋のように揺れているのだ。

何が起きているのかなどわからないが、これは、チャンスだ。

「なっ、隊長！ 捕虜が逃げます！」

「多賀谷……ッ、そうか、これが、お前の——」

甲崎が何かを言いかけていたが、俺は最後まで聞かずに、林の入り口へと向かって、走り出した。

走る、走る、走る、もたつく足がもどかしい、こんなに走るのは、小学校の頃のマラソンくらいだ、それからは、マラソンは全てサボってきた。

「ッ、はっ、はっ」

木々が前に立ち塞がり、それを避けるのが煩わしい、こんなことをしていたら、

「いたぞっ、こっちだ!」

ほれ見ろ、追いつかれた。

だが、林の外に出れば、何とかなる、だが、そんな俺の考えを嘲るように、林の闇は深く、出口なんて見えてきやしない。

「止まれ! さもなくば――」

「くそっ」

後ろを振り返ると、二、三人の人影が闇の中に見えた。

ここまでか、そう思った時だ。

目の前に、人を見つけたのは、一瞬だけ喜び、すぐに終わった、と思った。こんな林の中にいるのは甲崎の仲間だけだ、挟み撃ちにされたのだと、だが、よく見れば、そいつはヘルメットもなければ、迷彩服も着ていない。

焦っているため、暗いこともあり、女ということしかわからない。

その女が口を開く、

「『感世者B』を発見、これより、アナザー殲滅作戦に移行する」

感世者B? 俺のことか? それとも、後ろの奴らのことか?

女は腰に装着したフォルダーから二丁の銃を引き抜くと、構え、こちらへと向ける。

やっぱり、感世者Bってのは、俺のことなのか!?

「待て、俺は!」

「伏せて!」

女が叫ぶ。

夜闇の中でも輝いていた女の瞳と、目が合った。

俺は気づけば、指示に従い、転がるようにして地面に倒れ込む。

ゴウンッ、ゴウンッ、と銃声が響き渡る。

死んだ、マジで、そう思った。

だが、悲鳴が上がったのは、俺の背後からだ。

その時、ザッと、伏せた俺の頭の前に誰かが立つ。

「立てる?」

さっきの女の声だ、俺は恐る恐る顔を上げ、

「ッ」

思わず、息を呑んだ、女の顔が俺の顔の間近にあったからだ。女はしゃがみ込み、そして、手を差し伸べ、少し微笑んでさえている。月の光を反射する銀色の髪、瞳は洗練された宝石のようで、顔の輪郭、バランスも、計算されたように美しさを追求していた。

何というか、俺の好みだったのだ、だが、それはフィギュアの話であって。

ありえない、ありえない、俺が、人間を美しいと思うなど……
「どうしました？」

「別に」

俺は少女の手には触れずに、立ち上がる。

ただ、そこで気が付いた。

この少女、何の冗談か、着ている物が、服などではなく、軽装の甲冑に近く、腰のベルトには、四角い小さな箱が四つぶら下がっている。

「あなた、こんなところで、何をしていますか？」

言われて、自分が逃げていることを思い出す、しかし、その追っ手は、この女が……えっ？

と、後ろを振り返ると、そこには、俺を追ってきた奴らが腕や足を押さえて身悶えているではないか。

そうだ、俺は、助かったのか？

「とにかく、ここは危険です、あなたは、逃げてください」

「言われなくても——って、あんたは？」

思わず、口に出すと、少女はポカンッと口をほうけさせると、ニッと微笑み、

「？ 心配してくれるんですか？」

「ッ」

しくじった、何を心配しているんだ俺は、見知らぬ人間など、素材・肉がどうなろうと俺には関係のないことだ、だが、それ以上に、この少女が微笑んだ瞬間、ドキッとしたことも失敗だ。

だが、最大の失敗は――

「追いついたぞ」

ここで、立ち止まったことだ。

「甲崎……ッ」

「隊長！ 敵です！ 『カワラズノセカイ』の奴が！」

「わかつている」

甲崎は、俺は見ずに、突然現れた女の方を見る、何だ、やっぱり、こいつも甲崎のゲームの仲間――いや、ゲームではなくこれが本当に実戦だとしたら、この女は――？

「甲崎信吾、大人しく投降しなさい」

「それは聞けぬな、お前ら、カワラズノセカイは我々の初めの敵に認定された」

何だ？ 何なんだ、こいつらは――俺を置いて、話を進めるんじゃないやねえよ。

そんなことを考えていると、甲崎と目があった、赤い充血した目で、甲崎は俺を見下ろす。

「多賀谷、俺の仲間になれ、俺と一緒にそいつを倒そう、俺とお前ならできる」

口の端をつり上げ甲崎がせせら笑う、その姿に俺は自分の背筋が寒くなるのを感じていた。

そして、理解する、こいつはもう甲崎ではない、甲崎だが、俺の知っている甲崎ではないのだ。

そして、この元甲崎、もとい、馬鹿は、まだわからないらしい。

「俺に、命令すんじゃないやねえ」

甲崎の目元がピクツと反応した、甲崎の悪魔のような眼孔を、俺は平然と睨み付ける。

「多賀谷あ、死亡フラグが立ったぞ？」

「笑わせんな、そんなことも忘れたのか、お前は？」

「何？」

俺の声に、わずかに、甲崎が後ずさる。こんな優位に立っている

状況で、気圧される、それが、甲崎の器か、思わず、笑みを浮かべてしまう。

「死亡フラグ？ 最高じゃねえか、くはは、俺が一番、好きなエンディングはハッピーエンドなんかじゃない、主人公も、ヒロインも、グチャグチャになって、世界がぶっ壊れるエンディングが俺は大好きなんだよッ！」

別に、状況に付いていけず脳がイカれたわけじゃない。これが、多賀谷シンパチの性質というだけのこと。

興味を持てば、興味を持つほど、好きになれば、好きになるほど、それをぶっ壊したいと望む、破壊衝動、それが多賀谷シンパチではないか、この程度の脅迫で多賀谷シンパチは従わない。

「そうか、残念だよ、多賀谷」

甲崎はいっそ、清々しいほどの笑みを浮かべ、

「殺せ」

容赦なく、友人に対して、死刑宣告を行った。

闇に染まっていた視界が、光に染まり、いくつもの銃火器の射撃音が重なり、もはや、音の暴力となって耳をつんざく。

そして、俺の体は無数の弾丸に蜂の巣にされ、その穴からは蜂蜜よろしく、赤い血液が噴き出す。

——はずだったのだろう。

視界が光に埋もれた時、思わず、俺は目を閉じていた。だからこそ、誰かが自分の手を握ったのが感触で分かった。

そして、思いっきり、引っ張られ、その衝撃で目を開いた俺の目に映ったのは、あの女の体で、驚くべきは、下を見れば、あれだけ鬱陶しかった林の木のとっぺんが見えていたことだ。

早い話、この女は俺を抱え、木よりも高く、飛び上がったということだ。

俺は人間に触れられるのが嫌いだ、人間の持つあの生ぬるい温度

が嫌いではない。

だが、その少女は、

「お前は……」

そう、この少女は――

だが、その先を告げる前に、

「逃がすと思うか！」

「……ッ！」

少女が空で俺を抱き込んだ、瞬間、破裂音と熱気が空を支配する。
(何だ?)

音の正体も、この身を包む熱風の正体もわからずに、困惑していると、浮遊感のあった体に衝撃、どうやら、少女が地面に着地したようだ。

だが、その時、ズシッと、地面が揺れた。

少女が俺を下ろす、そして、

「何だ、ありゃ」

思わず、俺は言葉を漏らした。

先ほどの衝撃は、爆撃でもされたのだと俺は思っていた、少女を見ればケロッとしているが、まだ薄く残る焦げ臭さがそれを証明している。

だが、手榴弾や、ランチャーならまだよかったかもしれない。

俺は、俺の目に映ったものがリアルだと判断できなかった、だって、今、目の前にいるのは、

「さあ、戦いを始めよう」

鉄の巨人、いや、ゲームなどで出てくる人型の兵器に近い物体、その中から、甲崎の声が聞こえてくる。

「はあっ……？　ちよっと、待ってっ！」

鉄の巨人が動く、石像のように固そうなその体、しかし、それは柔軟なゴムのようにしなやかに動き、人間の動きも同然、そして、鉄柱だろうと片手で握りつぶせそうなほど大きな手腕をこちらへと向けた。

「こちらへッ！」

呆然とそれを眺めていた俺に向かって、少女が叱咤する。

鉄の巨人の前腕が変形、ズドドッと掘削機が地面を抉るような轟音をまき散らし、その前腕が火を噴いた。

放たれたのは、一発、一発に殺意が込められた弾丸の群れ、弾丸の群れはそれでこそ、嵐のように、俺との間にあった木々を抉り、弾き飛ばし、俺へと向かってきた。

俺の肉など、一秒、一発と持たずに消し炭となるだろう、だが。

「お前」

あの少女が、盾になるようにして、俺の前に立った。

当然、それは、弾丸の嵐にさらされることを示す。

弾丸が少女の身に襲いかかる、少女は手の平を前につき出したが、そんなもので防げるのなら防弾チョッキや防弾ガラスはこの世に必要ない。

だが。

「無駄です、そんな攻撃では触れることすらできませんよ」

ピタリと、全ての弾丸がまるで見えない壁に突き刺さったかのようになり、空中で停止、

「落ちなさい」

少女の一言で、バラバラと一斉に地面へと落ちた。

「……防ぐのではなく、止めたか、なるほど」

守られた俺でさえ、驚いている少女の力、だが、敵である甲崎はさも、防がれるのが当然であるような言葉を放つ。

そんな言葉には耳も貸さず、少女は再び、フォルダーから二丁の拳銃を引き抜く、あの時は焦っていたからよく見えなかったが、今はよく見える。

俺は甲崎の部屋でモデルガンだが、いくつか拳銃を見たことがある。だが、少女の拳銃は、そのどれにも該当しない、というよりも、おもちゃじゃないのか？ と疑ってしまう。

しかし、本物が偽物かは別にして、拳銃で、戦車のような外装を

したあの鉄の巨人に対抗できるとは到底、思えなかった。

だが、一発、ただの一発が、そんな俺の甘い考えを簡単に打ち崩す。

いや、一発だったかも俺にはわからなかった。

気づいた時には、光の一閃が空間を裂いていた、見えたのは一瞬、いや、見えたように錯覚しただけかもしれない、そして、鉄の巨人の肩部が消し飛び、後から遅れて耳を貫く轟音、先ほどの一瞬、本当に空間が停止していたのではないかと思うほど、空間が一斉に動き出す。

「これは」

あまりの轟音にいかれかけた耳に届いたのは小さく聞こえる愕然とした甲崎の声。

少女を見れば、握られた拳銃から、硝煙と言うよりも焦げたような白い煙が銃口だけでなく、銃身、さらには、グリップからも漏れている。

バスッと、少女の腰から何かが落ちた、それは、ベルトにぶら下がっていた四角い箱の一つだ、それが、ジジッと青白い光と拳銃と同じように白い煙を纏っている。

少女の銀色の髪は輝いており、髪と髪が接触するたび、バチッと青白い火花が散った。

先ほどの甲崎の攻撃が弾丸の嵐だったならば、少女の一撃は嵐を突き抜けるまさに雷の一撃、事実、少女の拳銃から放たれた一撃は、軽々と鉄の巨人の腕を肩から根こそぎ奪い去ってしまった。

「次は、本体に当てます」

少女の瞳が鉄の巨人を睨む、今の一撃を見せられた後ではその言葉は絶大な脅し文句になりえるだろう。

対し、

「ふはは、そうか、レールガンか、お前といい、アナザーの力を感じなかったゆえに驚いたが、実用されていたとはな」

初めこそ驚いていたが、甲崎は笑っていた、まるで、花火を初め

て見た子供のように、喜んでるようにさえ聞こえる。

「だが、それも、アナザーの前では対して意味を持たない」

先ほどから甲崎の口から出るアナザーという単語、聞きたびに、何か心の奥底で燻っている何かが雄叫びを上げている。

それと共に、どこで、その単語を聞いた気がするのか、思い出し始めた。

そうだ、その単語は、掲示板で有名になっている『NEXT.』と言う名のサイトで見たことがあるのだ。

その時、鉄の巨人の腕が肩口から生えてくるように、腕が元通りになった。

「馬鹿な、あなたはアナザーに目覚めてからまだ一週間足らずのはず、どうやって、そこまでの技術を」

「何、軍事演習というやつさ、一週間とはいえ、訓練に訓練を積んだ、この程度は序の口だよ、こいつの設計には多少、時間を食ったがね」

鉄の巨人の腕から次は大きな剣が三本、爪のように突き出た。

「お前の世界など理解する気にもなれんから原理はわからんが、放たれた弾丸は何らかの理由で止めたようだな、だが、身につけているものならばどうだ？」

鉄の巨人が疾走する、俺はもはや眼中にないらしく、甲崎は少女に向かって直進、近づけば近づくほど、小柄の少女と、鉄の巨人の体格差は歴然だった。

だが、少女には、あれがある。

少女は、甲崎が自分へと目標を変えたと悟り、俺から離れるべく、体を動かした。

甲崎も当然、それを追い、少女はそれを放った。

レールガンの一撃を。

鉄と鉄がぶつかり合う轟音、鉄の巨人がよろめく、しかし、

「残念だな、それが、アナザーによる代物でないのなら、こちらにも干渉させる余地がある、アナザーとしての経験はそちらが上でも、

力は同等のようだからな！」

雷の一撃は鉄の巨人を貫くには至らなかった、少女のベルトから、また四角い箱が地面に落ちる、もしかしたら、アレは、レールガンの電源なのかもしれない、だとしたら、

「残りは、二発か、さあ、どうする？ 近距離では貫けぬ、遠距離ではどれだけ速くとも、直撃を避けることなど造作もない、連発すらできぬのだからな！」

鉄の巨人の爪が、少女の横を通り抜け、木を軽々となぎ倒す。

「くっ……」

少女が、レールガンではない、普通の弾丸を発砲するも、

「無意味！」

そんなものでは、鉄の巨人にかすり傷すら負わせられない。

鉄の巨人の爪が少女の眼前に迫る、しかし、少女はニツと微笑んだ。

「いいえ、無意味などではありません、私にとっては、レールガンよりも、こちらが本命」

「な、に」

鉄の巨人の爪が少女の眼前で止まる。

ギシギシと鉄の巨人が悲鳴を上げ、鉄の巨人に異変が生じた。

「油断しましたね、レールガンから放たれる弾丸はもはや、“物”ではありませんが、普通の銃弾ならば“物”として処理できます、そして、あなたの纏ったそれもまた“物”に過ぎません」

少女が鉄の巨人を指差す。

「確かに、近距離や遠距離では仕留められないかもしれませんが、ですが」

ピタリと、少女は鉄の巨人の一箇所、拳銃の銃口を吸い付けた。

「あなたの頭部への零距离ならば、どうでしょう、例え防げて、あなたの頭は確実に潰れます」

「馬鹿な！ 何故だ！ 何故、動かん！」

鉄の巨人は甲崎の悲鳴に共鳴するようにギシギシと音を立てるだ

けで全く動かない。

「あなたを守るはずの鎧が、あなたを閉じ込める檻となりました、恨むなら、あなたと私の相性の悪さを恨みなさい、純粋な物理武器に頼る以上、未熟なあなたの勝利はありえなかった」

少女は悠然と、もう一丁の拳銃も構える。

「さあ、終わりです」

ガンッと、一発目で、轟音をまき散らし鉄の巨人が大きく揺れる、もはや、それだけで中にいた甲崎の鼓膜は破れ、肉は潰れたかもしれない。

だが、もう一発、容赦なく、少女は鉄の巨人へとレールガンを放つ。

ズドンッと、その衝撃で鉄の巨人は崩れ去った、でかい図体が地面に屈し、ズンッと地面が大きく揺れる。

殺戮機械だった鉄の巨人はもはや、ただのガラクタと化していた。

（ああ、惜しい）

少女の勝利、だが、俺の胸の中では何かが引かなかった、そう、何というか、あれは、

（俺が壊したかった）

あの無茶苦茶な物体を、甲崎の世界を、自分でぶっ壊してやれなかったことに、俺は落胆していた。

そこで、自分で自分に驚いた、今、まさに、自分を殺そうとしたとはいえ友人だった者が殺されたというのに、自分はそんなことを考え、口をつり上げ、笑ってさえた。

これが、己の本性だともいうように、だが、それは不快ではなく、むしろ、心地よささえ感じる。

後一步、甲崎に背中を押されていたら、自分も、甲崎や、この少女のいる場所に踏み込んでいたかもしれない。

惜しかったのか、別にどうでもよかったのか、『NEXT』に関すること、必要なくなったため、途中までで思い出すのをやめかけていた。

「怪我はありませんか？」

少女がこちらへと駆け寄ってくる、そうだ、彼女には聞かねばならないことがあった。

「き——」

口を開きかけ、俺はその場で停止した、彼女は決定的なミスを犯した、それは——

「あ、アアアアアア！」

甲崎の生死を確認しなかったことだ。

驚きに目を見開き、少女が背後を振り向くのと、甲崎の伸ばした腕が彼女の首を捉えたのはほぼ同時だった、

「そんな！ あの攻撃を防げるはずが……」

地面に叩きつけられ、少女が驚きの声を上げるが、甲崎の姿を見て、目を見開いた。

俺も息を呑む。

奴の体の半分は鉄でコーティングされていた、それは、腕や腹部、そして、頭部にまでいたる。

「愚かな、潰れた部位やパーツを鉄やコードで修復したようですが、所詮は付け焼き刃、あなたは時期に死ぬ、諦めなさい！」

「まだだ！ まだ、俺は死なない！」

甲崎は錯乱したような大声を上げる。

「諦めてなるものか」

そして、その機械に覆われた目が、俺をギロリと睨んだ。

「あっ」

俺は思わず声を漏らした、体を電気のようなものが駆け巡り、ゾクツと、体の奥底が疼く。

裂けて血まみれになった口で甲崎が笑む、

「逃げてえっ！」

少女が焦り、叫び散らす、だが、逃げてても無駄だ。

何故なら、一瞬で、甲崎は俺との距離を詰めやがった。

やばい、やばい、やばい。

甲崎の鉄に塗れた手が俺の頭を鷲づかみにしようとする。

「お前を、感世者Bにすれば、オレに、従エ、多賀谷あ」

寒気にも似た何かが頂点に達した時、俺は『NEXT.』に書かれてあった内容を思い出す。

アナザーとは、一般常識と言う名のリミッターを外し、〈別世界〉の〈常識〉を扱う者達のこと、そして、それによって、世界を創り変えていく者達のこと。

そして、アナザーがアナザーの世界を浸食しようとする時、アナザーの世界は、

“反発する！”

甲崎の腕が弾かれた。

「なっ、にが！？」

何が起きたのか、わからないのか、甲崎が鉄の表情を歪ませる。簡単なことだ、こいつは今、トリガーを引いたのだ。

寸前で踏みとどまっていた俺の背中を押してしまったのだ。

俺を、そちら側、アナザー側へと押し出してしまった、いや、引き込んだと言ふべきか、ただ、それだけのこと。

そして、俺は瞬時に右腕を動かし、甲崎の鉄の腕を掴む、瞬間、「馬鹿な、これは――」

甲崎の腕のパーツと化していた鉄がぶっ壊れ、ボロボロと鉄の腕が崩れ去る。

「アナザー！ 目覚めたというのか！」

その時、俺の脳裏に何か、怪物のような生物が映り、そいつは、俺の背後に〈ヘビジョン〉として浮かび上がった。

「それが、貴様のアナザー」

甲崎が忌々しげに呟く、見れば、甲崎にも、テントウ虫のような鉄の怪物がこびり付いているのが見えた。

俺は背後にいるそいつを見た、黒き炎の鎧を纏った姿の見えぬ怪

物、だが、何を恐れる必要がある？ 俺はこいつを知っている、こいつは俺の世界であり、俺の常識。

「『破壊神O』」

「笑わせるな！ 目覚めたばかりのアナザーなど！」

甲崎の腕から小銃が飛び出す、俺はそれを人目見た瞬間、ニイと口の端をつり上げた。

分かる、分かるのだ、その壊し方が、それを壊す方法が。

俺の背後に浮かんでいた『破壊神O』のビジョンが俺の腕に溶け込んでいくと、俺の腕を黒い籠手が覆っていた。

甲崎が引き金を引くよりも速く、俺はその腕で、小銃の銃口を塞いだ、瞬間、小銃を何かが駆け巡り、リングの皮むきのようにバラバラに解体される。

「なっ、馬鹿な、触れただけで、壊れただど！」

甲崎の体を見る、人と鉄が混ざり合った穢れた体、そんな甲崎を、俺は、

「くっ、ハ、ハハ、やべえ」

ぶっ壊したい、体が熱い、興奮で呼吸が上手くできない、甲崎、こいつは俺を支配しようとした、俺の世界を、自分の世界で変えようとした。

許さない、許さない、お前のようないかれた世界で、俺を支配しようとした。

「壊す」

そのいかれた世界、俺がぶっ壊してやる。

甲崎を破壊すべく、漆黒の腕を上げる。

だが、俺が何かをする前に終わってしまった。

その結末はあまりにも呆気なかった。

甲崎の肉体も、精神も、世界さえも、すでにこいつは限界だった、それだけのこと。

人はそれを崩壊と呼ぶのかもしれない、別に誰がどうしたわけでもない、甲崎自身が、勝手に、崩れ始める。

「ア、アアアア」

もはや、止まらない。狂った世界の末路とでも言うかのように、甲崎はただ、崩れていく、体を保っていた鉄のコーティングは乾いた絵の具のようにパラパラと崩れ始め、灰のようになっていく、精神はもう、何を考えているのか自分でもわかっていないだろう。

待機させられていた周囲の感世者Bと呼ばれた者達も、甲崎の崩壊と共にバタバタと倒れていく。

それを俺は、興味なさげに見つめていたと思う。

まただ、いつも、それを感じてしまう、壊してしまった後、それが壊れた後、楽しかった気持ちが一瞬で薄れ、この身を支配するのは忘失感ただ一つ、胸にポカリと穴が空いたようで、寒くなる。

「……つまんね」

そう呟くと、風が吹いた、崩れていく甲崎の灰が周囲に流されていき、

「オレは——」

「ッ！」

むせ返るようなガソリンと火薬の悪臭。

「死なない」

片目を失った甲崎と目が合った。もう片方の目は、崩れていきながらも笑っている。

そこで、気づく、周囲に散らばっているのは灰ではなく火薬、そして、このガソリンの臭いは、甲崎の血だ、見れば、まるで壊れた噴水のように甲崎の体中から、必要以上の血が周囲にまき散らされていた、そもそも、その量が人間一人にある量を並外れている。そして、ゴロツと地面を転がるボコボコの卵のような何か。

それが、ピンの抜かれた手榴弾だと気づいた時にはすでに遅く。

俺の視界は、真っ赤に染まり上がった。

——だが、俺はすっかり彼女のことを忘れていた。

迫る炎、それを目前にした俺を抱え上げる何か、それは、一気に空へと舞い上がり、視界に迫っていた爆発と炎がどんどん離れてい

く。

そして、顔を上げた俺の目に、月を背後にした彼女の顔があった。
「大丈夫ですか？」

「あ、ああ」

俺は人間が嫌いだ、そこいらにいる無関係な人間など素材・肉にしか見えないし、多少知り合っても、覚えるのは設定だけ、俺が人としての名前を呼ぶ相手は本当に限られている。

人形が人生の全てだからそうなのか、それとも、人間が嫌いだったから、人形を好きになったのかはわからない。

だが、何よりも、人の持つ、心の冷たさを誤魔化すあの肌の生ぬるさは触れていて嫌気が指す。

だが、彼女に触れた俺の肌が感じる彼女の温度はひんやりと冷たかった、この肌触りや、冷たさを俺はよく知っている、それは、いつも指でしか触れたことがないのだけれど。

そう、初めて触れた瞬間から感じていた違和感の正体を、俺は彼女に訊いていた。

「君は、人形なのか？」

その言葉に、少女は目を丸くする。

「正確には、人形よりもアンドロイドと呼ばれる部類に入ります、トップダウン方式を応用したナノマシンによって生まれた素材で造られた、対アナザー用戦闘兵器の一つです。この世界でも表では知られていない分、アナザーに対する抵抗力が強いため選ばれました。通常時は人と同じ温度を再現できますが、戦闘時はどうしても、冷却装置を作動させなくてははいけませんから、冷たくなってしまいがすが」

そう言った彼女の瞳は本当に宝石を加工して埋め込んだように美しく、彼女は人間ではないことがわかる、だが、不思議なことに時折、彼女は人間以上に人間らしく見えてしまうのは、何故だろうか。人間と人形が混ざり合ったような、そんな違和感すら彼女に覚えてしまう。

だが、そんなことは関係ない。

「すごい」

「え？」

彼女が目丸くする、色々と聞きたいことはあった、先ほどまで胸を支配していた喪失感は消え去っている、今、その胸を占めるのは興奮と喜び、まるで、初めて手品を見た子供のように俺は目を輝かせていたかもしれない。

だが、聞いておきたいのは、

「君の名前は」

名前、と呼ばれ、彼女はしばし、考え、

「正式名称は長いので、仲間は『セラ』と私のことを呼びます」

下の赤い炎と頭上の月に照らされ、燦然と輝く銀色の髪を揺らし、彼女は答えた。

セラ、素晴らしい名前だ。と言っても、恐らく、どんな名前でも俺は素晴らしいと思っていただろう、冷静な判断ができなくなるほど、俺の胸は焦がれていたから。

これは、ある意味で運命だったのかもしれない。

アナザー、破壊神O、狂った甲崎、これから調べなくてはいい単語がいくつか思い浮かぶが、今はそんなことはどうでもいい。

「セラ、俺は——」

きっと、ただの人間相手には死んでも言わないであろう言葉。いや、普通はこんなことは言わないのかもしれないが、俺はその言葉をセラに向けていた。

「君が欲しい」

それが、俺とセラとの出会いだった。

そして、その出会いは、俺の世界が動き出すきっかけとなる。

中心…多賀谷シンパチ

新川ポートアイランド、北側の橋で本島と繋がった人工島、東には港と倉庫があり、南側には空港へと繋がる橋がある。

一般人の生活において必要な施設は西と中央部に固まっており、俺の通う新川学園は西にある。

俺の住むアパートは、学校から二駅ほど離れており、ギリギリ中央部に入る。

学生用でないため家賃は高いが、面倒ごとや他の住人との関わり合いが少なくて済むため、ここを選んだのだ。

そのアパートの一室で俺は目を覚ました。

「……」

目を覚ました時の感覚は最悪だった。

昨晚の甲崎の最後を思い出してしまい、覚えていないが悪夢でも見ていたのか、着ていたシャツはビショビショだった。

昨晚、甲崎の最後の“足搔き”は人工林を燃やしてしまい、俺はセラに抱えられたまま無事に脱出したが、大きな火事に発展したが、セラは淡々と、

「近くに仲間がいます、事後処理は彼らに任せて、私達はこのまま、この場を離れましょう。何も教えられていない警官が来たら厄介ですから」

と、そんなことを述べたのだった。

——昨晚からつきっぱなしのテレビに視線を移すと朝のニュースで、その火事が無事に鎮火されたことが流れている。

そして、あの後、人工林から離れるように走って、走って、ようやく落ち着いたと思ったら、セラはまだしなくてはいけないことがあるらしく、すぐに消えてしまった。

また、会いたい、と告げはしたが、果たして聞こえていただろう

か。

——そんなわけで、俺の精神と肉体は満身創痍、肉体はともかく、精神の方も自分が思っていたよりも普通だったようで我ながら安心している。

今日は、学校がある。

どうせ、サボり魔の常連だ、やる気も起きないし、いつもならこのまま眠ってしまうのだが、

「チッ、めんどいな」

と、文句を呟きながらも、俺はベッドから起き上がった。

別に、学業に目覚めたわけではない。とにかく、学校でも何でも良いから、別のことをして、昨晚のことを紛らわしたかった。

「ん、おはよう」

俺はいつものように、人形と朝の会話を交わす。

これは、俺にとって欠かせない日課である、これをしないと俺の朝は始まらない。

そして、人形に触れようとして、ふと、その右腕を止めた。

昨晚のことを思い出す、今は漆黒の籠手は見えないが、あの力はどうなったのだろう。

「……アナザー」

アナザーという単語を聞いたのは、きっと、『NEXT』で見た時が初めてだっただろう。

だが、あの力、あれは、昔から知っていたようにしっくりきた。

胸の奥に隠されていたパズルのピースが、甲崎によって、見つかってしまったような、そんな感覚。

運良くなのか、運悪くなのかは知らないけれど、別段、体に異常があるわけでもないし、そんなに焦って対応はしなくてもよさそうだ、病院に行っても健康体で済まされそうな気がするし、何より、医者に、素材・肉に触れられたくない。

俺は目に入った空のペットボトルを握る、あれが、発動した時の感覚は覚えている、否、忘れられるはずがない。

自分の中の何かが表へと解き放たれるような、むしろ、自分が世界を喰らうようなそんな感覚。

そして、力が発動した。

だが、現れたのは、あの時、俺の腕を包み込んだ漆黒の籠手ではなく、指にシンプルな黒いリングが現れただけだ。

「？ これも、あれと同じなのか？」

俺の疑問に答えるように、あの時と同じように壊し方が頭に流れ込んできて、完全に理解した時、

バキッと、ペットボトルが破裂するようにはじけ飛んだ。

「……何だ、こりゃ」

これが、俺のアナザーって力なのか、俺が集中を解くと、指輪はドロリと溶けて消えた。

「……まあいい」

指輪の消えた指を眺め、呟く。今は難しいことは考えたくなかった、俺は登校時間まで嫌なことを忘れるように人形と戯れ、そこで思い出す。

「セラ」

彼女ともう一度会うことは叶わないのだろうか？

揺れる電車内。

いつもより遅く出たせいで、電車内は学生やサラリーマンでごった返していた。

それだけでストレスが溜まる、ああ、むかつく、人間嫌いの俺から見れば、人間など、素材・肉でしかないと言うに。

と、その時、

「あ、そういうや、聞いた？ 何か、通ridoのあの森、燃えたらしいじゃん」

「はあ？ 行方不明の次は、放火魔かよ、新川も終わり何じゃねえの？」

特に緊張感のない声で、学生が話しているのが聞こえてきた。

だが、それが普通だろう、自分達には関係ない事件、知り合いとの話の話題にしかない他愛のないニュース。

火事の原因も、昨晚の出来事も知っている俺が異常なのだ。その火事の中で、一人の男が死んだことを知っているのも。

朝のニュースでは火事での死者はなしということになっていた。考えられるのは、ただ、単に発見されなかったか、セラの仲間の仕業か。

だが、気絶していた他の連中のことも考えると、セラの仲間の仕業と考えるのが妥当だろう。

セラの仲間、あの場で聞いた単語が脳裏をよぎる。

『カワラズノセカイ』と、確かに聞いた。

携帯電話のネットで調べるも、検索結果は当然、0数。

「わからないことだらけだ……」

小さく舌打ちすると、近くにいた学生服の素材・肉が俺を睨むが、当然、無視。

セラ、アンドロイドと言っていたが、あの動きや、温度など、人間でないことは確かだと思う。それとレールガン、原理は二本のレールと電流によって発生する磁場で、レールに挟んだ弾丸がそれこそ雷のような速度で撃ち出される仕組みだと聞いたことがあるが、理論はあれど明確な問題点があり、未だに実現はされていなかったはずだ。

アンドロイドと、レールガン、共に一般では知られていない技術、そこに意味があるのかもしれない。

だが、あんな技術を持っている組織が存在するということが信じられない。

そして、それ以上に不可解なのは、当然、アナザーという力か、そのアンドロイドと、レールガンすらも甲崎は凌駕していた、今でも、あの鉄の巨人を鮮明に思い出せる。

セラがあれを倒せたのは、未知の技術の力ではなく、セラもアナザーの力を使っていたからだ、鉄の巨人が甲崎の意志に反して停止

したのはそのためだろう。

思うに、アナザーとは、俺のように“破壊”するという力ではなく、個人差があるのかもしれない、つまり、それぞれが持つ別世界、その別世界の常識を扱う者が、『アナザー』なのだ。

とにかく、セラの組織がアナザーに関わる組織だということはわかってる。

だとしたら、アナザーの情報を流している『NEXT.』というサイトは一体、なんなのか。

駄目だ、情報が少なすぎる。

『NEXT.』には、アナザーが起こした事件に関しても記載されている、『神隠し症候群』、『引きずり魔』、『殺人鬼・エース』どれも実際に起こった、そして、まだ解決していない謎の事件ばかりだった。

そんな事件も、一般人は警察が馬鹿なだけだと笑っているが、アナザーの存在を知ると、現実味をおびてくる、アナザーならば可能なのではないかと思ってしまう。

今、この新川で起きている多数の行方不明事件もそうだ、甲崎に従っていたような感世者Bと呼ばれていた彼らがその行方不明者とも考えられる。

だが、甲崎は死んだ、ならば、新川の事件はここで終わった、甲崎の死で終わったのだ――

『次は、新川学園前、新川学園前』

アナウンスが電車内に響き渡る。

「そんなわけないだろ」

いや、新川学園前であってんじゃない、と隣にいた二人組の素材・肉が皮肉るように言ったが、無視して、俺は電車を降りた。

そう、そんなわけがない、行方不明事件は甲崎が行方不明になる前から起きていたのだから、それに、セラが甲崎が目覚めたのは一週間前だと言っていた。

まだ、何か、起こるかもしれない、まるで、昨日、この世界を知

るまでの世界が偽物だったかのようなのだ。

俺は自分の手が震えていることに気が付いた。

恐がっているのか……なんて、くだらないことを考え、まさか、と思った。

むしろ、にやけてしまうほど、俺の心は今の状況を楽しんでいた。その喜びの起源はわかっている。

何かすごいものが壊せるという破壊衝動、それ以外にはありえず、この身の震えは武者震いに過ぎない。

それに、何たって、その狂った世界には、彼女がいるのだから。

新川学園、私立の高等学校、場所的な環境は悪いが設備が いいので、ここを希望する学生は多いらしい、俺がここに入学したのは、とりあえずは一人暮らしがしたかったからか。

そんな学校での昼休み。

「いやあ、しかし、驚いたな。甲崎の野郎、俺達に何も言わずに転校だぜ？」

俺も含め、三人の男が教室の隅で固まって昼飯を食べていた。

今、口を開いたのは、しまやまきこうすけ島崎耕介。

「そうだよな、そんな素振りもなかったのに」

答えたのが、みやけたくま三宅琢磨、どちらもとりあえずは、俺の友人ということになっている。

「お前は何か知らなかったのかよ？」

島崎が俺に話を振ってくる、正直に答えたところで信じられはしないだろう。

「いや、何も聞いてないな」

「マジかよ、甲崎は俺達の中で、お前に名前を呼ばせた初めての男だったからな」

「そうそう、シンパチ君、最初の自己紹介でクラスメイト全員のこ
と、素材・肉って呼んで問題になったもんね」

「今でもこいつは変わらないけどな、赤の他人は素材・肉、必要最

低限の関係者は設定・クラスメイトでようやく、名前だからな、甲崎や三宅はよかったが、俺なんて、一年かかったぜ。この人形至高主義者め」

「黙れ、妄想野郎」

「何だと！？ 妄想の何が悪い！」

「否定はしないんだね、島崎君」

三宅がため息を吐く。

「妄想なんて触れられない物に依存するお前の思考回路が理解できないな」

「人形だって、しゃべらないじゃないか」

「人形はしゃべるんだよ」

俺の言葉に島崎どころか三宅まで、また出たという顔をする。いつものことなので、慣れたものだ。

「お前なー、マジで精神科の病院に行ってこいよ」

「お前らには聞こえなくても俺には聞こえるんだよ」

そう、ずっと、小さい頃から俺は人形と会話することができた、誰も信じないし、不気味がられたりするが、素材・肉に認められようと認められまいと関係ない。

と、言い合う俺と島崎を交互に見て、三宅が言う。

「ぼくには、どっちもどっちだと思うけどね」

「はぁ？ リアルで彼女のできるお前こそ俺には理解できん」

島崎が、本来、恥であることを誇らしげに言う。

「金にかかるし、うるさいし、めんどいじゃんかよ」

まあ、島崎の言うことは理解はできるが、俺の場合、金がかからなくても、うるさくなくても、めんどくさくなくても、素材が肉という時点でアウトだ。

「それって、完全にひがみだね♪」

「うるせー！ ってか、お前、また彼女変えたらしいな」

「変えたんじゃないよ、増えたんだよ」

ニコリと笑いながら三宅が言う、こいつの恐ろしさはここだと思

う。島崎が吐き捨てる。

「最低だ、お前だって十分に異常だろ」

お前が言うか、と心の中で思いながら、質問。

「なあ、島崎、お前の家族構成は？」

「妹が八人、姉が五人、全員、俺のことが好きなんだぜ、あ、母親は三人な」

「……お前は終わってるな」

「うるせー、人形と会話とか言っているお前も十分にやばいだろ、妖精でも見えてるんじゃないか？」

「だから、どっちもどっちだと思うけど、やっぱり、ぼくが君たちを正しい道に導かないといけないね」

「合コンの誘いか？　ありえねえ、素材・肉とそんなことしたら臭くて鼻が腐っちまう。ってか、どうあっても、お前の一人勝ちだろ」

「だよなー、俺達をダシに使うなよ、他にも飾りはいんだろ」

「……はあ、挑戦すらできないなんて、ダメダメだね、君達の将来が不安だよ」

「将来が不安って、お前な」

島崎が呆れるように言った。

「毎回、テストで最下位のお前に言われたくねえよ」

「うっ……、いや、二人が良すぎるんだよ！」

成績の話になると三宅は弱い、彼女と遊んでばっかなのかは知らないし、俺は成績で全てを判断する気はないが、最下位というのは問題だと思う。

俺の成績は上の下くらい、島崎に関しては上の上クラスである。

「まあ、俺は美人な家庭教師のお姉様がいるからな」

え？　と三宅が声を上げる。

「いやいや！　それも妄想でしょ？　自分で自分に教えているようなもんじゃない！」

「甘めえよ三宅、この妄想野郎は、そのシチュエーションを妄想したいがために、全ての教科書を丸暗記している男だ」

「何その無駄な努力!? 全然、尊敬できないのが逆にすごいんですけど!」

三宅にしては失礼ともとれる言葉が飛び出した。

「そんな言い方ないだろ! あ、そういや、放課後、飯でも食いにいかね? いい店があんだけど」

三宅の言葉も大したダメージではないのだろう、簡単に流して、島崎が話題を変える。

「あ、ごめん、ぼく無理、新しい彼女と遊ぶからさ」

「チッ、これだからリアルは……シンパチは行くよな?」

「悪いな、俺も今日は新しい彼女が家に来るんだな」

「新しい彼女じゃなくて、どうせ、人形だろ!」

そんな島崎の言葉とチャイムの音が重なると、教師が入ってきて、席に着けと命令を下す、ここで、会話は終了だと島崎と三宅が自分の席へと戻っていった。

——その問題が起こったのは昼休みも終わった五時限目だった。

「おい、多賀谷、多賀谷!」

授業中は睡眠の時間と俺は決めており、今も、思考と幻が入り交じる浅い眠りをしていたのだが、

「起きんか、貴様!」

何かの衝撃に机が揺れ、机に俯せていた俺の頭を揺らす。誰かが、俺の机を蹴ったのだろう。

仕方がなく、起き上がると、目の前にいたのは、瓦のような歪んだ死角の顔をした設定・物理教師の姿。

いつもなら無視しているのに、今日はやけに怒っているようだ。

「チッ」

眠る気も削がれたため、舌打ちし、完全に起き上がった。

だが、

「何だ、その態度はッ!」

あろうことか、物理教師は俺の机を蹴飛ばし、ガシッと、物理教

師の手が俺の頭を鷲づかみにした。

瞬間、頭が真っ白になった、恐いのではなく、逆だ。

プチッと、俺の中で何かが切れ、全身に虫酸がはしる。

「俺に触るんじゃないやねえ！ 素材・肉があっ！」

ほぼ殴るように、物理教師の腕を弾き飛ばす、

「貴様！ 教師に向かって！」

「ああっ！？ 知らねーよ！」

その時、ビキッと、俺の怒りに反応するように、机が軋む音が耳に届く。

そして、

——ドンッ

——その音に、物理教師が驚き、目を丸くした、教室が一瞬、ざわめき、すぐに静まり返る。

全員の視線は、それへと向けられた。

——俺ではなく、教室の中心で座っていた一人の少女に。

「先生、そんなことをしていないで、授業を進めていただけますか？」

はっきりとした黒い瞳に、鴉のように黒く腰の辺りまである長い髪を後ろで結んだ女性生徒、制服をきっちりと着こなし、一つたりとも違反のない真面目そうな少女。

二宮亜里砂、学校内ではお人形委員長と呼ばれている女。

そして、俺の幼馴染みでもあり、俺が一番苦手な女だ。

俺の脳が命令するのだ、あの女に触れてはいけなないと。

「あ、ああ、すまない、授業を進めよう」

物理教師が言って、黒板へと戻っていく、それと同時に俺は立ち上がった。

「お、おい、多賀谷」

遠い席から島崎の声が聞こえるが無視。

「てめえに触られて気分が悪いから保健室に行く」

言い捨て、物理教師を睨んだ後、俺は教室を出て行った。

物理教師が背後から何か怒鳴っていたが追ってはこない。

俺はそのまま、保健室ではなく、屋上に向かった。

この学校、基本的に屋上は開放されているが、自殺防止のためか、フェンスの上部に有刺鉄線がからめられており、まるで、留置所のようなものである。

と、その時、

「あれ？ どうしたの、シンパチ君」

ペントハウスの上から声が落ちてきた。

そちらを振り向くと、そこには、一人の少女の姿。

「小原か……」

「ちいーす、君もサボりかい？」

おはら

小原さくら、確か、隣のクラスの女子生徒で、高校一年の時から
の付き合いがある。まあ――

「……まあな」

付き合いと言っても、この屋上でだけだ。

俺はサボると決まってこの屋上へ来ることが多い、小原も見た目は真面目そうだが、頻繁にサボっているようで、ここで鉢合わせすることが多いのだ。

いつも、会話はあっちが一方的に話しかけてくる。

「ねえねえ、今日は何かあったの？」

「別に」

「嘘だ、シンパチ君、授業をサボる時は授業の初めからサボってるじゃない、途中で抜け出すような面倒くさいことはしないでしょ」
「お前に俺の何がわかる？」

「だから、わからないから教えてほしいんだよ」

ニコリと小原が微笑む、三宅から聞いた話ではこの小原は学校でも人気がある女子らしい。

そして、こいつは、人のことを知りたがる、何かあっては質問、

何かあつては質問ばかりだ。

正直、うざったいが、他に行くところもないので、答える。

「物理教師がウザかったんだよ」

「物理教師？ えと、シンパチ君のクラスはあたしと同じ教師だったから、ああ、宮下か、あの人、むかつくよね」

そして、答えるとこいつは決まって賛同する、反対するのを聞いたことがない。

こいつはそういうタイプだ、もしも、人と意見が違ってても、相手を変えるのではなく、自分が変わって理解しようとするタイプ、俺としては最もどうでもいいタイプだが、あまり好きではない。

「無理に理解しようとするなよ、俺の怒りは俺だけのものだ」

「うわっ、酷い。人がせっかく慰めてあげようと思ったのに」

「そりゃどうも、お気持ちだけで結構だ」

俺が答えると、小原は時計に目を移した後、よっ、とペントハウスから飛び降りる。

すると、地面に付いた手をゴシゴシと拭いた。

「手を拭くならわざわざ上にあがるなよ」

「あー、上って気持ちいいじゃない？ それに、あたしのパパ、潔癖症でさ、あたしにもうるさいんだよ」

「はっ、お前のことなんて、どうでもいいよ」

俺が突き放すと、小原は嫌そうな顔をして、そのまま、ハンカチでドアノブを掴む。

「友達なくすよ？」

「俺は人形だけがあれば、万々歳だ。他のは全て、勝手に付いてきたけりゃ付いてくればいいさ」

「へー、じゃあ、あたしも付いていっていい？」

「お前、人の話、聞いてないだろ」

「えー、気になるじゃん、君に付いていった後は何があるの？」

「……さあな」

ふーん、と呟き、小原は屋上を出て行った、と同時に終業のチャ

イムが校内に鳴り響く。

俺の行く先にある世界？ そんなものは決まっている、いつでも、その世界は俺の脳裏に刻まれていた。

俺は、ポツリと呟く。

「そりゃあ、ただの瓦礫と骸の世界だろうさ」

学校が終わると、俺はとつとと教室を出た。

グラウンドには練習前の設定・野球部員が体操をしたり、話をしたり、と好き勝手にしている。

その横を抜けて、校門を抜ける。いつもならこのまま、電車へ直行だが、今日は予約していたフィギュアを取りに行かなくてはいいない。

「くはっ」

思わずにやけてしまう、やはり、俺にはフィギュアが全てだ、心がこんなに躍るのはフィギュアのことを考えている時だけだ。

今にもスキップし出しそうな足取りで向かったのは、駅の近くにある新川商店街、その中にあるビルの地下一階に、俺の行きつけの店がある。

そこでフィギュアの受け取りを済まして、俺は店を出た。

すぐにでも帰ろうと思ったが、夜飯は弁当や外食で済ませているため、食べる物を買わなくてはいいけない。

俺は、とつさに目に映った普段はあまり行くことのないコンビニへと足を運んだ。

「いらっしやいませー」

やる気のない声、見れば、アルバイトだろう、自分と同じくらいの歳の男がだるそうにレジで立っていた。

俺が弁当を選んでいると、自動ドアが開く音がして、いらっしやいませー、とまたやる気のない店員の声。

新しい客が来たのだろう、俺は弁当を選び、他にも飲み物などを選んで、レジまで持っていく。

「こちら、温めますか？」

俺は小さく首を振った、店員はそれを確認して、精算を始める。わずかばかりの暇な時間、俺は何気なく、店内を見渡して、

「……」

つまらないものを目撃してしまった、それは、他の学校の生徒が、自分の鞆の中に精算されていない商品をしまい込んでいる場面、早い話が万引き現場だ。

「……ッ」

少女の顔が苦笑いで固まる、自分とは違う学校の制服に、眼鏡をかけた長髪的女子生徒、髪の色は茶髪、だが、染めているのではなく、先天的なもののように見え、全体的に真面目そうに見える女子生徒だった。

まあ、やっていることは犯罪なのだから真面目もクソもない、そして、俺は。

「……」

無視して、レジに表示された金額を財布から取り出して精算。

そのまま、コンビニを出た。店員に言わなかったのも、注意しなかった理由も明解、誰が何をしようと俺には関係ないからだ。

さあ、早く返ろう、今日は一日中、鑑賞会だ。

思わず、表情がにやついてしまうが、すぐに俺は顔をしかめさせた。

別に周囲の素材・肉に気味悪がられるのが嫌だったからじゃない。誰かが自分を尾行していることに気が付いたからだ。

パツと後ろを振り向くと、茶色の長い髪が物陰に隠れるのが一瞬だけ見えた。

「何なんだ、あいつは」

何故、跡を付けられているかは知らないが、気分が悪い、俺は物陰へと向かっていった。

「おい」

「ひゃ、す、すみません！ すみません！」

再び、顔を出した女子生徒に声をかけると、女子生徒は慌てて、何度も、何度も、頭を下げる。

「何だ？ 俺に何か用か？」

「え？ 用って言うか、その……」

俺の言葉に意外そうに女子生徒が目を瞬かせる。

「さっき、見ましたよね？」

見た？ 万引きのことか？

「ああ、見たな、それが？」

「それがって、えと、こういう時は人として叱ったり、止めたり、するものじゃないでしょうか？」

「はっ？」

待て、どうして俺は万引きをした奴に万引きを注意しなかったことを注意されているのだ？ 店員に文句を言われるならまだしろ、この女子生徒に言われる筋合いはない。

というよりも、この言い方だと。

「何だ、叱ってほしかったのか？」

そういう風に捉えろと言っているようなものだ。

「へ？ ええと、そんな直球で言われると困っちゃいます。それじゃあ、私に変態さんみたいですし」

「……？ 結局、何が言いたいんだ？ 叱って欲しいなら、盗った物を店員に見せて、怒ってくださいって尻尾でも振ってろ」

そんなことをすれば確実に変態だがな、と俺は身を翻して、再び、道を歩き出す。

「あ、待ってくださいよ！」

「何だ？」

「店員さんじゃ駄目なんです」

「何で？」

「店員さんが叱るのは、店の売り上げのためでしょ？ こっちのことなんてお構いなしです、私が悪いことをしたことを純粹に心配して、心の底から私のために、私を叱ってくれる人がいいんです」

「よくわかった、警察か病院に行け」

もはや、俺はこの少女と関わる気が失せた、元々、そんなものは微塵もなかったはずだったのだが、こんなくだらないことに時間を割くのはもう止めだ。

「じゃあな、もう追ってくるなよ」

いい加減にイライラとしていた、俺は早く家に帰りたいのだ、この一刻が惜しい。

「あー、待ってくださいよ!」

「待たん!」

「うう、私、構ってほしいんです! 暇なんですよ!」

「よけい知らん!」

我ながら変な奴に会ってしまったと、滅多にいかないコンビニに入ったことを後悔しつつ、駆け足で少女を振り切った。

——シンパチの逃げる背中を見送りながら、その女子生徒は薄い笑みを浮かべる。

「あーあ、初めての接触は失敗だね、勝美ちゃん」

女子生徒の周囲に他の人間はいない、なのに、

『そうね、室長の言うとおり、めんどくさい奴みたいね』

返事がどこからともなく返ってきた。

「まあ、まだ、一回目だし、彼がそうと決まったわけじゃないんだよね?」

『……ええ、ところで、知美』

「ん……? 何?」

『接触はいいのだけど、どうして、あんなことをしたの?』

「あんなこと? って、これのこと?」

知美と呼ばれた女子生徒が鞆を開けると、そこには、コンビニの精算されていない商品がびっしりと敷き詰められていた。

『返してきなさい』

「ええ! 嫌だよ! 接触ついでに盗ってきたのに!」

『悪い子は嫌いよ』

「私は良い子が大嫌いだもん、良い事なんてしたら、脳みそが腐っちゃうよ」

周囲の人間が不審げな目で自分を見ていることに気づいていないのか、“誰か”、と言いつき合いを始める知子、それもそうだろう、知子の会話の相手は、誰がどう見てもどこにもいないのだ。

『怒るわよ』

「え？ 叱ってくれるの？」

叱られる、と言う単語に目を輝かせる知子。それに対して、姿の见えない勝美はため息を吐く。

『あんたは……本当にどうしようもない子ね』

中心…多賀谷シンパチ2

いつもの駅で俺は電車を降りた。

時刻は、六時半、冬の名残か、空が暗くなるのが早い気がする。

薄闇の中、ここからは徒歩だ、フィギュアの入っている鞆に衝撃を与えないように大切に握って歩き始める。

しかし、と考える。あの万引き女子生徒は何だったのか？ 変な奴の一言で済ませられるが、例のこともあって、あいつも、アナザーなのではないか、などと疑ってしまう。

馬鹿らしい、ありえない。そんな偶然があるわけがない。

だが、偶然ではないとしたら？ つまり、あいつが意図的に俺に接触してきたのなら、あり得ない話ではない。

意識しすぎかもしれない、だが、あの人工林でこの件は命に関わることだと思い知らされたのだ、せめて、数ヶ月は警戒をしておいても無駄ではないだろう。

と、そんなことを考えているうちに、アパートが見えてきた。

今から、予約してからの長い期間楽しみにしていたフィギュアを拝めると思うと今から体中がゾクゾクとする。

そして、アパートの全容が見えてきたところで、俺は気が付いた。アパートを上がる階段に誰かいることに。

「ああ、くそ」

面倒くさいな、と俺は思う。あの位置にいられると自分を気づかせるか、声をかけるかしないと通れない。

「おい——」

そして、俺は、怒鳴り気味に声をかけようとして、

「おや、遅かったんですね」

想定外の人物がそこにいたのを見て思わず、コンビニの袋を地面に落としていた。

「せ、セラ」

「はい、今日は何かご用事でも？　学校が終わったのはもう少し早い時間だったと思いますが」

「な、何で？」

思わず、俺は訊いてしまっていた、何で、セラが？　ここに？　もしかしたら、甲崎のことを調べていて、一応は友人であった俺の情報もあつたのかもしれないが、それでも、まさか、こんなに早く再会できるなんて。

すると、セラは少し顔をムツとさせる、アンドロイドと聞いたが、その動きも、表情も人間そのものだ。

「あ、あなたがまた、会いたいと言ったのではないですか、だから、こうして、会いに来たのに」

「あ、悪い、まさか、本当に来てくれるとは思わなかったから」
怒ったのか、そっぽを向いてしまったセラに対して素直に謝罪する。

「ふふ、冗談です」

そう言って微笑むと、セラは地面に落ちたコンビニの袋を拾って、渡してくれる。

受け取った時に、手と手が少し触れあつた。

温かい人の肌のような温もり、そう言えば、人の温度を再現できると言っていたっけ？

この相手が人間ならば嫌悪してしまう温度だが、セラならば問題ない。

「えと、寒かったんじゃない」

「寒かった？　私はアンドロイドですよ？」

「いや、そうだけど、あゝ」

上手く言葉が出てこない、ありえないくらい緊張している、こんな緊張は、フィギュアの整理をしている時くらいだ。

と、よく見れば、セラは人工林で来ていた甲冑アーマーは着ておらず、静かめな白と黒のチェックのオーバーブラウスに、黒いパンツと普通の服装をしていた。

まあ、あんな格好で街中を闊歩すれば警察に捕まるのは当然なので、そこは、あえて突っ込まないが、何というか、普通の服装になったため、余計に、彼女がアンドロイドのようには見えず、思わず、じつくりと眺めていた、おかげで緊張はなくなったのだが、

「あの……あまり、見られると照れるのですが」

「あ、悪い」

照れる……か、今の言葉といい、本当に、彼女はアンドロイドなのだろうか？ 何だか、キツネに化かされているような気分がしてならない。

俺が疑問に思っていると、沈黙の後、セラが口を開く。

「言うタイミングを逃したのですが、少しお時間よろしいでしょうか？」

セラの声が真剣さをおびる、どうやら、単純に会いに来たわけではなく、本題があるようだ。

「今からか？」

「いえ、多賀谷様の都合のいい日で構いません、いつでも、お迎えに上がります」

なるほど、だが、それに答える前に、色々と疑問が浮かんた。

「待て、何で俺の名前、いや、名前は甲崎の件で調べているのか」

「ええ、失礼ながら、多賀谷シンパ様は以前までは三重の方で親戚の家で育ち、新川高等学校に進学すると同時に一人暮らしを初め、入学時、甲崎信次とお出会いになられていますね」

「そうだけど、その前のほうの情報は必要ないか？」

「……とにかく、多賀谷様の都合が付く日で構いません、会談の席を設けていただけるとありがたいのですが」

さりげなくスルーされてしまった、別にいいけど。

「それは、やっぱ、あれに関する事とか？」

俺の言葉に、セラは一度、頷くと申し訳なさそうな顔をした。

「申し訳ありません、今回の件は私に責任があります。私がしっかりしていれば、甲崎が多賀谷様に接触することはなかったはずす

から」

「いや、そのことは気にしなくていい」

それは、相手がセラだからではなく、何となく、どの道、いつかは自分はこちら側に引きずり込まれたような気がする、いや、そもそも、こちら側が元々自分のいるべき場所なのだという気さえしていた。

それでも、セラはまだ、顔を俯かせていた。最近の技術というか、セラの組織の技術はすごいと思う、思考はAIなのだろうか？ 皮膚の動きも、何もかも、人間と変わらない。

でも、そんな顔をされていると嫌なので、

「そうだな、ちょっと、待っていてくれ」

「あ、はい」

セラが答えるのを聞いて、俺はさっさとアパートの部屋に戻ると、荷物をベッドの上に置いて、とりあえず、制服だけでも着替えると、すぐに部屋を出た。

「よし、行こう」

「今から、よろしいのですか？」

「早いほうがいいだろ？ それに、セラにまた会えて、昨日のことが夢じゃないってはっきりと認識したからな、何も知らないで危険な目に会うのはまっぴらごめんだ。話を聞くなり早いほうがいい」

「ありがとうございます、多賀谷様」

嬉しそうに頭を下げる、セラに告げる。

「シンパチ」

「はい？」

「呼び捨てでいい、様付けってのは、どうも、背筋が痒くなる」
てつきり、セラは断るかな？ と思っていたが、意外にも、頷いてくれた。

「わかりました、シンパチ。では――」

「待った、立ちっぱなしってのもあれだし、近くにファミレスがあるから、そっちに行こう」

俺はその方角を指差して言った、ついでに飯も食べられることだし、滅多に利用しないファミレスだが、

「あ、そうですね、すみません」

「謝らなくていい、でも、セラって、何か食べられるのか？」

「一応は、それ専用の消化装置も存在しますから」

つくづく、セラのハイスペック度に驚かされながら、俺とセラは、ファミレスへと向かった。

中心…多賀谷シンパチ3

ファミレスに着いてから、一先ず、食事を済ませると、問題の話を始めることにした。

「とりあえず、『アナザー』と呼ばれる存在が何かを説明しましょう」

「ああ、頼む」

ドリンクバーで取ってきた珈琲を一口含み、それを嘔き出すようなトンデモ設定が飛び出てこないことを祈りつつ、俺は耳を傾けた。「まず、アナザーは正式名称、せいしんせいへんかいしょうかんじや世心性変界症患者と名付けられます、ですが、病気というわけではないので安心してください。『アナザー』という単語は、元々、世界政府が悪魔や天使などの別世界の住人を指す時に使っていた隠語です」

世界政府？ 国連のように世界を繋ぎ合う組織はあるだろうが、実際に世界全てを統治する一つの組織があるなんて話は聞いたことがない、しかし、今は関係なさそうなので、無視しておく。

「何だ、アナザーってのは悪魔や天使の力ってことか？」
随分とオカルトっぽい話になってきたな、と心の中でため息を吐く。

オカルトは嫌いじゃない、むしろ、好ましい。理由は明解、ホラー映画なんかだと、大抵の場合がバッドエンド、もしくは、それに近い結果になるからだ。

わずか、一時間三十分程度の人生の何万分の一にも満たない時間の間に感情移入した主人公やその仲間達が無様にも散っていくのは嫌いじゃない。

だが、どうにも、これはオカルトというよりも、超能力やウィルス、そういった方面の分野に近い気がする。

「アナザーの起源としては、神様が持っていた世界を変える力、もしくは病原体がこの世に感染したとも、どこかの研究機関が行って

いた超能力開発の結果生まれた謎の生物のウイルスが広がったとも、宇宙から落ちてきた未確認生命体が持っていたウイルスだとも言われていますが、結局、全て、空想上の理論に過ぎません、ただ、起源がいて、それから広まったという説は濃厚らしいですが」

「どうでもいいけど、そんなこと話してもいいのか？」

自分はアナザーに目覚めたとはいえ、ただの一般人だ。話を聞くなり、大きな組織が動いていそうだし、こういうのは隠蔽しなくてはいけないのでは？　と思つての発現だったのだが、

「構いません、所詮は、戯れ言。シンパチが誰かに熱心にそれを説明したところで、本気で信用する者などいませんよ」

「確かに、その通りだ」

俺が納得するのを確認して、セラが話を元に戻す。

「悪魔や天使は、この世界にはない常識『魔術』や『異能』を使います、つまり、別世界の常識をこの世界で行使しているのです。それに対して、アナザー、この場合、シンパチや私のことですが、アナザーもまた、この世界にはない常識、シンパチなら人工林で見せたあのガントレットですね、ああいった非常識な力を扱います、ゆえに、悪魔や天使と同様にアナザーと呼ばれるのです」

「つまり、アナザーの力は個人、個人で違うのか？　俺なら、何とどうか、触れただけで物が壊れたりするんだが」

「はい、アナザーの能力は個々によって違います。原因は、個々の精神や魂といったものにアナザーの能力は影響されるからです。元々、アナザーの力というものに、形はなく、アナザーを得た者の精神や魂がアナザーの形、つまり、別世界とその常識を創るのです。ゆえに、似たような力はあれど、全く同じ力というものは存在しないと考えられていますね」

確かに、甲崎はガンマニアだったからか、何もない空間から兵器を取り出していたようにも見えた。

単純に考えるなら、放火魔なら炎を扱うような力がアナザーになり、殺人鬼なら殺人の助けになるような別世界を持つということか、

だが、普通とは言えないが、出来心や、大して何も考えずに犯行を犯す者では目覚めず、純粹に家を燃やすのが好きとか、人が死ぬ姿を見るのが好きとか、特殊な思考回路を持っていないと目覚めないわけか。

つまり、アナザーとは遠回しに他の人間には理解できない異常者であるということだ。

「また、アナザーは異常識を持つため、悪魔にただの弾丸が効かないように、アナザーで強化しないかぎり、普通の銃火器ではダメー
ジすら与えられません。そういった意味でも、『流^{ノーマル}される者』、一般人のことを我らはそう呼びますが、彼らがアナザーに勝つのは困難を極めるでしょう」

「なるほど、だから、セラみたいなアンドロイドやレールガンみたいな表向きには知られていない兵器を使っている訳か、でも、セラもアナザーの力を使えるんだろ？」

まさか、それも、セラの組織が開発したというのだろうかと考えていると、

「いえ、私は、特別製と言いますか、他のアンドロイドとは少し、違いますので」

「ああ、そりゃそうだよな」

他のアンドロイドがどんなものか知らないが、何となく、セラは特別な気がした、俺の中でそう思っているだけなのだが。

「とりあえず、今までの話をまとめると、要は銃火器や兵器以上にアナザーは危険な力ってことだな、で、それを管理しているのが、セラの所属している組織、そう考えて良いか？」

「はい、そう考えて問題ないでしょう」

だとしたら、これから訊くことが、俺にとって一番重要なことだろう。

「で、俺はこれからどうなるんだ？」

どんな事情があるにせよ、俺はアナザーに目覚めた、その力が消せるのならば、あの場で消していただろうし、準備が必要なら説明

したはずだ、だが、セラは謝っただけだ、それは、つまり、アナザーに目覚めたら消せないということだろう。

だが、セラは真剣な眼差しで俺の目を射止めると、

「いいえ、あなたは変わりません」

「何？」

「今まで通り、アナザーに目覚める前と同じ生活を送ってください、アナザーのことは忘れて、今まで通りに」

セラは、まるで自分がそう望んでいるかのような様子で祈るように告げてきた。

「そんなことできるのか？」

恐らく、アナザーに関する詳細を全て聞いた訳じゃないが、アナザーに関しては裏で多くの組織が動いていると考えていいだろう。だとしたら、それに巻き込まれる可能性は大だ、実際、俺は甲崎に狙われたわけだし。

だが、セラは俺を安心させるように力強く頷くと、

「大丈夫です、あなたの身に迫る危機は全て、私が排除します。だから、安心してください」

「それは、セラの組織の考えか？」

「……いえ、私個人の意見です」

責任感が強いというか、真面目なのか、どうやら、俺を巻き込んだことを相当気にしているようだ。

「守ります、何があっても」

己に言い聞かせるようにセラが言う、決意すら感じるその申し出はありがたいが、俺にも言いたいことがあった。

——話が終わり、店を出た後、俺は言いたいことを言っておくことにする。

「セラ、これだけは覚えておいてくれないか？」

「何でしょう？」

首を傾げるセラに俺は一度、頷いて、

「セラがいるなら、例えば危険があっても、そっちの世界に首を突っ

込む覚悟はあるよ、俺にはね」

その言葉に、セラは目を丸くし、息を呑む。
そして、少し、怒ったような顔を見ると、

「馬鹿です、シンパチは」

照れるように身を翻し、そのまま、去って行ってしまった。

しまった、確かに、今の発言だとセラが頼りないように聞こえてしまったかもしれない。

訂正しようにもセラの姿は闇に消えてしまった。

と、そこで、俺は、自分が心の中で思っていたことに気づいて、苦笑してしまう。

――次に会った時に言えはいいや、とそんなことを考えていたのだから。

何となく、セラとはまた会えるような気がしたのだ。

――夜の校舎とは不気味なものである。

昼と夜では、学校の雰囲気は一変し、夜に学校に侵入するのと、デパートに侵入するのと、どちらが恐いかで言えば、それは、学校の方だろう。

何故なら、学校では何かが出ると言うのが、もはや定説になっているから、学校には自分達の知らない幽霊の類が住まっているのだと、幼い頃の日常を通して記憶に打ち付けられるからである。

だからこそ、きつと、今日、学校を覗き込んだ者がいたなら、ギョツとしたかもしれない、そこにいたそいつを幽霊か何かの類と勘違いしたかもしれない。

ぐちゅ、ぐちゃ、と何か、肉でも喰うかのような音がグラウンドに響き渡る。

グラウンドの中心、暗いため、端から見たら犬か怪物に見えたかもしれないが、そこには、四つん這いになって何かを貪る男が一人。月の光に反射するその顔は、高級料理店で出された料理を食べる

かのように光悦な表情をして、握ったそれを貪り続ける。

男の傍にはホースがあった、そのホースからは大量の水が排水され続け、男の地面を濡らしていき、大きな水たまりが完成されていた。

男は、その水たまりの中で、それを必死に食べ続ける。

「おぐっ、え、ご」

否、食べるというよりも、口に押し込んでいると言ったほうが正しいのかもしれない。

表情は嬉しそうなのに、男の目から涙が流れ続けていた。

うん、うん、と男が頷く、

「残さないよ、残さないから」

飲み込んで謎の言葉を残す男、だが、そんな光景は長くは続かなかった。

「ふぐっ、お……」

男が大きく揺れ、その体が水たまりに沈み込んだ、その目からはすでに生気が失われ、ごぼごぼと、今まで食べていた何かが、口から漏れ始める。

それは、食べ物などではなかった。

男の口から漏れるそれは――ただの泥だったのだから。

目覚め、襲撃

次の日、俺の目を覚ましたのは、携帯電話の着信音だった。

「何だ？」

着信音が最大であったため、脳に響くほどのさっさと出なければと携帯を探す。

運良く、携帯電話が手元にあったのですぐに電話に出ることができた。

『おい！ 多賀谷か！？』

だが、着信音よりもでかいそいつの声に、電話を思わず切りかける。

「……誰だ？」

寝起き十声がかましくて誰だかいまいち判別できない。

『俺だって、島崎だ、寝ぼけてんのか？』

何だ、島崎か、と電話に出たことを後悔する、そもそも、時刻を見ればまだ六時を過ぎたところだ、登校時間までにはまだ余裕がある。

「何の用だ？ 学校に一緒に行こうぜ、なんて言った日には、今日の夕日は拝めないと思えよ？」

早朝と電話越しのでかい声は神経を荒立ててくれる、ぶっちゃけ、半分以上本気で言った言葉。

『馬鹿、それどころじゃねえ、それと学校はないからな、これは連絡網だ』

「は？」

学校がない？ いまいち、島崎の言うことが理解できない。

『いいから、寝てたならテレビを見ろ、多分、まだ、どっかのニュースでやっているはずだ』

言われるがままに、俺はリモコンを操作して、テレビの電源を付けると、そこには、いつも通っているはずの校舎が映されていた。

テロップには、『新川ポートアイランドの男性教諭、窒息死』の文字。

そして、被害者の名前が表示され、俺は、目を細めた。

宮下真太、誰だ？ と、思い出そうとしていると、

『昨日、お前に突っかった教師だよ！』

島崎の言葉で思い出す、そういえば、あの教師、そんな名前だったか。

「つまり、これのおかげで今日は休みてことだな」

『お前な、自分トコの教師が死んだってのに……本当にドライだよな。でも、昨日のこともあるから、警察もお前の家に来るかもしれないぞ？』

「チッ」

確かに、どんな内容かわからないが、死んだ被害者と前日に揉めていたなんて、怪しさ抜群じゃないか、何もしていないのだから、心配することなどないが、話をするだけでも面倒だ。

『まあ、気を付けろよ、お前、怪しいからさ。疑われて連行されても文句言えないぜ』

「あんな、何の確証もないのに、連行されるわけないだろ。あるとしても、任意同行だ」

言いながら、それでも、面倒なことには変わりないと、俺は心の中でため息を吐く。

それに、もう一つの不安要素は、甲崎の件だ。甲崎の家族が引越したのは本当のようだが、甲崎については結局、行方不明のままにされていると訊いた。

だとしたら、行方不明者とも友人で、周囲の人間からは怪しまれ、一人暮らし、そして、今回の件だ。

正直、最も疑われて当然な容疑者なわけだ、実際、甲崎の件には関わっているわけだし。

『ふーん、まあ、気を付けろよ、濡れ衣を着せられるかもしれないぜ？』

「テレビの見過ぎだろ、それに、この事件、別に殺人と決まったわけじゃないんだろ？」

ニュースの詳細はわからないが、窒息死ということは自殺も考えられるだろう。

『ああ、でも、ニュースの話だと、よくわからんが、泥で窒息死したらしいぞ？』

「泥？」

俺が疑問に思うのも当然だろう、泥で窒息死？ そんな状況、土砂崩れの被災者ならばまだしも、学校で起こった死因なわけがない、自殺するにしても、そんな明らかに苦しい死に方を死を望んだ者が行うとは思えない。

ならば、他殺か？ 被害者を薬か何かで昏睡状態にして、泥を喉に押し込む、可能かもしれないが、しかし、効率が悪すぎる、よほど、泥で殺すことにこだわりでも持っているなら話は別だが、普通はありえない。

『とりあえず、今日は学校は休みだからな、次の奴にも伝えと——』

「そっちはお前に任せた」

言って、俺は一方的に電話を切った。

数秒間、待ってもかけ直してこない、これは、無言の了承だろうと受け止めることにした。

「……」

俺は起き上がって、常にスタンバイ状態にしてあるパソコンを立ち上げ、インターネットへアクセスする。

もしかしたらのつもりで、確認したのだが、案の定。

サイト『NEXT.』には、今回の事件が記載されていた。

更新されたのは、早朝のニュースが流れると同じ時間帯だった。

『NEXT.』に記載されている情報が全て本当だとは限らない、起きた事件を適当に載せているだけかもしれない。

しかし、アナザーの説明に関しては、セラの説明と一致するのだ。だとしたら、この事件をアナザーが起こしたってことも本当の可

能性がある。

気が付けば、マウスを持つ手に汗がにじんでいた。

これは――まずい。

もしも、アナザーが起こした事件だと仮定すると、他の組織も、これはアナザーが起こした事件として認識するはずだ。

当然、セラの所属する組織も。

彼らはアナザーの管理をしている、そして、俺がアナザーに目覚めたことを知っていて、この事件。

警察が俺を拘束するのは不可能だが、彼らが俺を捕獲しようとしてもおかしくはない。

セラは守ってくれると言ったが、それは、セラ個人の考えであることは確認している。俺に疑いがあるのなら迷わずに捕まえにくると、その時、

――ドンッ、ドン

まるで、俺が事態を把握するのを待っていたかのようなタイミングで、この部屋の扉がノックされた。

ドンッと、その大きな音は荒く、確実にセールスマンや知人の類ではない、そもそも、朝のこのタイミングでそれはない。

だとしたら、考えられるのは二択、警察か、もしくは。

俺は恐る恐るノックされた後は静まった扉へと近づいていく。

そして、覗き穴から外を除くが、覗き穴を塞いでいるのか、真っ暗で何も見えない。

どうする？ 寝たふりをするか、もう少し、心を落ち着ける時間がほしい。

だが、そんな時だ。

俺の背後で携帯電話が大音量で着信を知らせたのは、

(しまった……ッ)

流れているのはアニメの主題歌の着信音、据え置き型の電話にそんな着信音を設定する奴はいない、だからといって、いきなり、音楽が流れるのはおかしい。

相手はすぐに、携帯電話の着信音だと悟ったはずだ、携帯電話を置いて外出する者は少ない、俺が家にいることはばれたに違いない。そして、寝ていたとするにも、今の着信音で起きないわけがないと判断するはずだ。

ドンッ、ドンッ

当然のように、相手はまた扉を叩く、今度は何度も、何度も、まるで、呪うかのように音を打ち鳴らす。

もはや、逃げ場はない。だが、一体、誰が電話をかけてきたのか、俺は恐る恐る電話の表示を見ると、そこには、非通知、の三文字。鳴り続ける携帯電話に、部屋を揺らすようなノックの音。

狂いそうになる頭を抑え、俺が部屋の扉を開けると、そこには、「ようやく出てきた」

右手で携帯電話を耳元に当てた、一人の少女、左手でノックをしていたようで、扉が開くと同時に左手を下ろす。そして、彼女が携帯を切ると、部屋で鳴り響いていた俺の携帯電話も鳴り止んだ。

わかったことと、驚いたことが一つずつある。

わかったことは、この少女にはめられたということ。そして、驚きは、

「お前は、あの時の――設定・変態女」

眼鏡をかけた気品のある顔、その女が昨日のコンビニで万引きをしていた女だったからだ。昨日の今日だ、素材・肉には興味がなくとも、覚えてはいる。

その女は、一度、さわやかに笑むと、スッと、人差し指を俺に向け、告げる。

「多賀谷シンパチさん、あなたを、アナザー悪用の容疑で確保します」

目覚め、襲撃2

「はい、私の世界にようこそ」

目の前に現れたあの女は俺の腕を引くと、俺はもの凄い力で玄関から外に投げ出され、

「冗談だろッ」

二階から、下の駐車場へとたたき落とされた。

背中に重い衝撃、だが、不思議と痛みはなかった。

「あはは、驚きすぎですよ。アナザーに覚醒したなら、力を発動させなくても、五階くらいまでの高さからなら落とされても、動けますよ」

女の言うとおり、衝撃こそあったが、俺の体にダメージはない。

しかし、昨日の嫌な予感^{予感}は当たったということか、この女も、アナザー。

二階の高さから、こちらを見下す少女、華奢な体からは考えられない力で、男である俺の体を平然とここまで投げ飛ばしやがった。

だが、身体能力の向上だけが、アナザーの力ではないことは、もう、わかっている。

恐らく、アナザー同士が戦う上で、最も重要なのは、相手が持つ常識、アナザーの能力だ。

「お前——」

「あ、こちらだけ名前を知っているのは失礼ですね。私の名前は九条知美^{じょうともみ}と言います」

投げ飛ばした後で自己紹介も何もないだろうに、それよりも、こんな場面、他の奴らに見られたらどうするんだよ、と俺が思っていると、それを見透かしたように、

「安心してください、一般人の退去は済んでいます」

「それも、アナザーの力か？」

「そうですよ、というよりも、退去させなくても、よほど意志の強

いノーマルじゃないと力を発動させたアナザーのことは認識できませんから」

と、その時、九条知美が自分の手に持った携帯電話を開くと、

「じゃあ、勝美ちゃんに替わりますね？」

替わる？ 誰かに電話をかけているのか？ と首を傾げていると、

九条知美は自分の耳元に携帯電話を押し当てた。

そして、すぐにスツと、携帯電話を下ろす。

「？ 何だ？」

九条知美の意味のわからない行動に、俺は首を傾げるしかなかった。替わるとはどういうことなのか。

「おい、九条知美だったか……勝美ってのは、誰だ？」

すると、九条知美は何を思ったのか、突然に眼鏡を外した、そして、キツと、こちらを睨み付けると、自分を指差し。

「誰だ？ って、勝美は、私はここにいないじゃない」

「何……？」

「だから、あたしが九条勝美だって」

九条知美、いや、勝美？

「どうということだ？」

「そうね、強いて言うなら、二重人格かしら。私も、知美も互いに自分達のことは別人だって思っているけどね」

二重人格？ 俺は眉をひそめ、勝美と言い張る女を見る。

眼鏡を外しただけで容姿は全く変わっていない、そもそも、二重人格だ、容姿まで変わったらそれは二重人格ではない。

二重人格を証明する方法なんてもの、俺は持っていないから、こいつが二重人格だと仮定するとしても、二重人格というのが、こいつのアナザーなのか？

勝美は、未だ変わらず俺の部屋の前に立ったまま、そこから俺を見下している。

近づいてくる気がないのか？

「さて、多賀谷シンパチ君。これから、君を連れて行こうと思うん

だけど、私にはある命令が下っているの」

「命令？」

「そう、私は良い子だから、命令は守らないといけないわ。私は知美と違って、褒められるのが好きなの」

勝美という人格に変わっても変人ということに変わりはないか。

「とにかく、その命令ってのは、何だ？」

「試せ、と言われたわ」

「試せ？」

「そう、私達の組織はアナザーをこの世界の害虫程度にしか考えていないわ。アナザーが危険なのはすでに証明されているもの、だから、組織は、アナザーを生かして管理するにしても、殺すにしても、そのアナザーが持つ別世界を把握することに専念するわ」

確かに、どんな能力かを把握しておけば、事件が起きた時に誰がやったのかは調べやすくなり、万が一に殺す時も、やりやすくはなる。

だが、

「そんな説明をされて、自分のことを話す奴なんていると思うか？」

「思わないわ、強引に、脳を解体して調べるのもいいかもしれないけれど、『室長』は、あなたに関してではそれは止めたほうがいいと言ったわ。だから、こうして、わざわざ、検査の場を用意したの」

検査の場？　だんだんと、空気が不穏になってきた、そもそも、こんな話をするなら、別に俺をここに投げ飛ばして神経を逆なでする必要はなかったはずだ。

それに、胸がざわつくというか、何か嫌な感じがする。

まるで、自分の知らない別世界に迷い込んだかのような錯覚。

逃げなくてはいけない、そんな気持ちが胸を支配し、

「あら？　別にいきなり逃げなくてもいいじゃない」

唐突にぶつけられた勝美の言葉に、俺は息を呑んだ。

（思考を読まれた？　それが、こいつの力か？）

考えていたことをズバリと言い当てられ、俺が困惑していると、

そんな様子の俺を勝美は指差した、否、勝美が指しているのは俺ではない、俺よりも後ろ、そこにいる、そいつに。

「おいおい、何だ、これは？ 何なんだ！？」

正確に言うならば、それは、この世に物体として存在しているのなら誰でも、どんなものでも持っているものだ。人が歩けば、そいつも歩き、人がしゃがめば、そいつもしゃがむ。

まだ、日の光は薄いというのに、まるで、黒の絵の具をぶっかけてたかのようにそいつはくっきりとしていた。

「俺の影が、俺から離れていく？」

はっきりと視認できる俺の黒い影が、どんどんこの場から逃げようとするではないか。

「お、おい、どうなってんだ、これは」

俺が慌てて、追いかけてようとすると、俺の下を別のそいつは通り過ぎる。

「やり過ぎては駄目よ、知美」

突如として、もう一つの影が現れた、俺の立っている地面を高速で動くそいつは、九条勝美と同じ形をした影。そいつも、九条勝美から離れて行動している。

そして、九条勝美の影はグングンと、俺の影に近づいていくと、体当たりするように九条勝美の影が、俺の影を殴りつけた。

「ッ、ごっ」

瞬間、頭を鈍器か何かで殴られたかのような衝撃に、俺は地面に叩きつけられる。

攻撃、そうだ、今、俺は攻撃されたのだ。だが、勝美は以前、俺の部屋の前に立ったまま、こちらを見下ろしてるだけ。

だとしたら、見えない攻撃か、もしくは、

俺から少し離れた位置で、見つめ合うようにして、対峙する俺の影と、九条勝美の影――あれが、関係しているのしか思えない。

つまり、検査はすでに始まっているということか。

「抵抗するアナザーの能力を調べるには、検査機器なんて意味がな

いもの。アナザーを調べるには、アナザーを使うのが一番」

九条勝美が笑みを浮かべる。

「これが、お前のアナザーか！ 九条勝美！」

「あら？ 勘違いしては駄目よ、これは、私と知美のアナザーよ、ねえ、知美」

勝美が言った瞬間、九条勝美の影が頷いてみせる。

影、それが、こいつの、こいつらの力なのか、そして、話を聞く限り、あの影を操っているのは、知美。

肉体は勝美が操り、影は知美が操作する、だとしたら、俺は？俺の影は？

「あなたの影は、あなたが操るのよ。影の世界と、こちらの世界は繋がっているから、あなたの影がダメージを負えば、あなたも負傷する。簡単でしょ？ まあ、影を操るのは、気持ちや精神に左右されるから、操りづらいかもしれないけど、初心者でも簡単にできるわ。人は肉体を動かす時に感覚的に行動するけど、影を操るには、ゲームのキャラを動かすように、右腕を動かしたいなら○ボタンとか、ちゃんと、頭で考えなければいけないのだから」

まるで、ゲームの説明をするように勝美が口を開く。

それは、つまり、あれか？ 俺は、自分の肉体と、影を一人で操るということか？ 九条勝美と知美は二人で協力して二つのコントローラーを操っているのに対して、こちらは、一人で二つのコントローラーを操らなければいけない。

俺は影を見る、右に動けと考えると、影はそれに従って右に動く。まるで、地面というゲーム画面で格闘ゲームをさせられているような感覚。

言えることはただ一つ、それは、圧倒的に俺が不利だということ。

「『ドッペル・ナイト』、これが、私と知美のアナザーよ」

『ドッペル・ナイト』、どうやら、アナザーだから二重人格になったのではなく、二重人格だからこそ、このアナザーに目覚めたということか。

ドッペル、もう一つの自分、その二つから連想される単語は、ドッペルゲンガーと呼ばれる、都市伝説の現象。

そして、噂では、ドッペルゲンガーと遭遇してしまった者は。

「死ぬわよ、あなた」

勝美が口の端をつり上げて、笑う。

「だって、あなた、ドッペルさんに会っちゃったんだもの」

破壊神 O VS ドッペル・ナイト

死ぬわよ、と勝美は告げてきた。

それに嘘偽りはないのだろう、勝美は俺のアナザーを検査するために俺を殺す気にかかる気だ。そして、俺がそれを防ぐには、こちらのアナザーを発動させるしかない。

アナザーの力は、そいつが持つ別世界の常識そのもの、力を出させれば出させるほど、その常識は浮き彫りになる。

だが、アナザーの力を使わないわけにもいかない、俺がアナザーであることは確認済みなのだ、俺を殺しても、組織は九条を責めたりはしない、ゆえに、九条勝美は俺を殺しにきている。

『ドッペル・ナイト』、それが、九条の力。

俺は視線を地面へと、自分の影へと落とした。

影の世界、いや、正確には、肉体と影が繋がった世界と言わべきか。いつの間にか、俺はその世界に飲み込まれているのだ。

肉体と影、二つの体を持っていても、それを動かす精神が一つであるため、片方がやられれば、こちらもやられる。

影の世界には音もなければ、臭いもない、何も見えない、ゆえに、影の世界を確認するのは、こちらから、地面の影を確認し、影を上手く操作しないといけないということだ。

だが、影の状態を目で確認しながら、肉体も動かし、操作の難しい影も動かさなくてはいけない……そんなことは不可能だ。

しかし、それは、九条勝美の影、知美も同じはずだ、だが、恐らく、あの二人は心の中で会話して、勝美が知美に情報を提供しているのだ、だから、勝美は情報を提供することに集中するため二階から動こうとしていない。

そして、知美は、何不自由なく、五感のない世界を動き回れる。

しかし、それはありがたいことだ、肉体側の九条勝美は俺を観察しているだけで動こうとしないのなら、ここは、影を動かすことに、

専念すべきだ。

俺が、右へと逃げろと意識すると、影はその通りに動く。

しかし、影の世界は2Dに近い、左右に動くのは問題ないが、上下に動くことの操作が難しすぎる。普通、何もない地面に立つ3Dの人間は上や下へは移動しない。

そんな俺の影に対して、九条勝美の影、知美は、まるで水中を泳ぐ魚のように、上下左右問題なく、俺の影の周囲を旋回している。

いつくる……、そんなことを考えていた時だ。

パンツと、その音が響き渡ったのは、どこかで聞いたことがある音、それは、あの人工林で聞いた音。

銃声……そして、影の世界の音は聞こえないということは。

「しま……ッ」

俺が後ろを振り返ると同時に、何かが俺の頬をかすめる、確認するまでもなく、銃弾だ。

振り返った先の光景は、俺の予想通りだった。

拳銃を構えた九条勝美の姿。

「あら？ こっちを意識していいのかしら？」

一瞬、勝美の言葉の意味がわからなかった、だが、すぐに自身の体を襲った痛みにより己の過ちを悟らされる。

「ッ、ヴ！」

その衝撃は音もなく、俺の体を襲って、俺は地面に叩き伏せられる。

俺の影が、勝美に気を取られているうちに知美によってボコボコにされているのだ、狂ったように影の姿をした知美は俺の影を殴り続け、そのたびに、その影と感覚が繋がっている俺の体は悲鳴をあげる。

「く、そっ！ 逃げろ！ とつとつ、右に逃げろ！」

言葉で発して、その行動を自分に意識させる、相手に行動を知られることになるが、とにかく、影を逃がさなければ、捕まったら終わりだ。

影は俺の思惑通りに右へと逃げる、そして、その先には、

「むっ」

九条勝美が声を上げる、そう、俺の影が逃げた先、そこは、

「建物の影の中に隠れてしまえば！」

自分の体が完全に入るくらいの建物の影なら、混じってわからなくなるはずだ、と俺は判断した。

「これなら、影のことは無視してお前を叩ける！」

と、俺は動こうとして、

「なっ……」

自分の体が全く、動かないことに気づいた。

「ふふ、馬鹿ね、感覚を共有していると言ったでしょ、今、あなたの影は建物の影と一体化している、つまり、こちら側のあなたはコングリート漬けにされているのと同じってことよ」

まさか、そこまで感覚を共有しているとは思わなかった、だが、俺は影を出させようと思い、建物の影へと視線を向けたが、そこで、息を呑む。

「出てきたら、知美があなたに食いつくわよ？」

俺の影が隠れた建物の前には、九条勝美の影が待ち構えている。

「ここまでね」

肉体である勝美は、迷いなく、拳銃をこちらへと向けた。

このまま、止まっていれば勝美に肉体が殺され、影を出せば、知美に食いつかれる。

「……」

仕方がない、俺は一か八かの賭に打って出る。

「『破壊神O』ッ！」

アナザーの発動、俺の右腕を漆黒の籠手が包み隠していく。

「無駄よ、影の世界は私の世界、あなたの影はアナザーの力を使うことはできない」

九条勝美の言葉には耳を向けず、俺はそれを確認して、ほくそ笑んだ。

「だから、こうするんだよ！」

俺は、自分の影を建物の影から飛び出させる、

「だから、影はアナザーの力を使えないのよ？ 自在に動ける知美と、あなたの影とじゃ、実力の差は歴然、素人が格ゲーの達人に勝つくらい無理なことだわ」

勝美の言葉通りに、俺の影は知美の影に捕捉された。

そして、今度は打撃ではなく、知美は俺の影の首を絞め始める。

当然、ミシミシ、と肉体側の俺の首が絞まってくる、見えざる魔手が俺の首を掴み、俺の首がべこりとへこむ。

（なんてこった……）

「あーあ、捕まったみたいね。ここで、終わりかな」

自分の手で首を確認するが、首にまわりついている物は何もない、俺の影が首を絞められているのだ。こちら側からでは、皮膚がめり込んでいるのが、確認できるだけだ。

「く、はっ……」

「あら、もう限界？」

呼吸を漏らすように言葉を発した俺を見て、楽しげに、勝美が笑みを浮かべる、きつと、見えないが影の知美はさも楽しそうに俺の首を真っ正面から締めているに違いない。

だからこそ、俺は首を絞められながらも、口の端をつり上げた。

「まさか、ここまで上手く行くとはな」

瞬間、俺の影が動く、知美の体に抱きつくと、そのまま、握って離さない。

そして、俺は首を絞められながらも、そのまま、自分の影と知美に近づいていく。

「何？ 何をする……まずい、知美、逃げなさい、こいつ、何かするつもりよ！」

「正直、二つの不安があった。俺は自分の力がどの程度のもんか、まだ、わかっていないからな、影なんてもんを破壊できるのか疑問だった」

パンツと、勝美が俺に向けて拳銃を発砲するが、俺は籠手で弾丸を受け止めると、弾丸はクルミのようにかち割れた。

九条勝美の影、知美は、俺の影を必死に引きはがそうとするが、離れない。知美が俺の首を絞めようとしてくれたのは助かった、あのまま、なぶられるように打撃メインで攻められたら、捉えられたかどうかかわからない、それが、二つ目の不安だったわけだ。

そして、アナザーの力が作用しないのならば、俺の影と、知美の力はほぼ直角、もしかしたら、男の俺の方が力は強いのかもしいが、とりあえず、止めていられればそれでいい。

メキメキと、俺の首がどんどん絞まってくる、どうやら、知美は俺の影の首をへし折ろうとしているらしい。

「無駄な足掻きだ」

だが、残念ながら、もう、俺は、そこに着いていた。

九条勝美の影、知美の真上に、文字通り、知美を見下し。ニヤリと、笑みを漏らす。

「さて」

俺は漆黒の籠手を振り上げる。

「ぶっ壊れちまいな」

俺は知美に向かって漆黒の籠手を振り下ろした。

「知美は影よ！　こちら側が触れられッ」

触れられるはずがない、と勝美は言いたかったのだろう。だが、

勝美の叫びは途中で途絶えた、何故なら、

「ッアアアアアア」

自分の言葉を否定する痛みが勝美を襲ったからだ。

そして、俺の漆黒の籠手は、地面を砕かず、影に沈み込んでいた。そして、影である知美の中でベキベキと、何かが壊れる音がする、九条勝美の影である知美が言葉もなく暴れ、ようやく引きはがすようにして、俺と俺の影から逃れていく。知美が離れた瞬間、俺の腕は弾かれた。

「チッ、しっかり掴んでおけよ。完全に破壊しそこねた」

自分の影に文句を言い、俺は勝美の方へと視線を向けると、何とか手すりに捕まっている勝美は恨むような目で俺を見てくる。

「あ、ありえない、影の世界にまで、侵入するなんて、何なのよ、あんたのその腕は」

「『OMEGA』」

この籠手の名前はOMEGA、正確には、破壊神Oの一部。

「いや、俺も驚いたぜ。お前の影を見た瞬間、その解体方法が頭へと流れ込んできたからさ、正直、記号や数字ばかりで、他人の世界の破壊方法だからか俺には理解できない情報だったが、どうも、俺のOMEGAは解体方法の情報さえあれば、それを実行できるようになったっているみたいだな」

そう説明して、自分自身にもわからないことがある。

俺は、数日前にこのアナザーに“目覚めた”はずなのだ。

なのに、この力にしても、OMEGAという名前にしても、思い付いたと言うよりも、思い出したように感じられるのは何故なのか？
ずっと、昔から、この力のことを知っていたような。

「ッ」

その時、頭痛が俺の脳を襲う、万力に締められたような痛みで、まるで、何かの傷口に触れてしまったかのようなのだ。

とにかく、今はそんなことはどうでもいい。

俺は、肉体である勝美も影である知美も動けないのを確認して、二人が動き出す前に、飛び上がり、二階の手すりへと着地する。

勝美は倒れたまま俺を睨むが、手に握った拳銃の引き金を引く力もないらしい、結構、破壊したから、そう簡単には、動けないだろう。

そして、俺は自分の部屋へと戻っていくと、この部屋に戻った目的の物を手に持った。

それは、俺の携帯電話だ、予想通りと言うべきか、俺の携帯電話からアナザーの力を感じる。

「ばれちゃった、わけか」

勝美が部屋の外からそう漏らす。

あの時、九条が俺の部屋のノックをして、俺の携帯電話が着信を知らせた時点で、俺は九条の二人の世界へと招かれてしまっていたのだ。

そして、俺と俺の影を繋げていた物がこれ、携帯電話だ。勝美と知美が入れ替わる瞬間に、電話を耳元に当てたことと、俺が動けなくなった時も勝美が俺の部屋の前から動こうとしなかったのがヒントになった。

どうやら、こいつらの影の力は、携帯電話を利用するらしい、俺が携帯電話の画面を開くと、真っ暗な画面が映っている、恐らく、これは俺の影が見ている映像、真っ暗な中心には、知美が自分の肩を抱いて震えているのが見える、そして、俺が携帯電話を耳に当てると、

『痛い、痛いよ、勝美ちゃん』

予想通り、知美の声が聞こえてくる、これは、俺の影の耳が知美の声を聞いているのだろう。

「これで、終わりだ」

俺はとつとつ、自分の携帯電話を開く方向とは逆方向へとへし折った。

「まさか、自分の携帯電話を逆パカする羽目になろうとは」

携帯電話が壊れ、俺は別世界に迷いこんだような違和感が消えたのを感じる、その通りに、自分の足下を見れば、影はいつもの定位置に戻っていた。

「何かの話じゃねえけどよ、影はやっぱり、ここにあるのが一番だな」
心底、そう思いながら、俺は勝美へと視線を向ける。

「で？ どうする？ まだ、殺るか？」

「いいえ、十分よ」

勝美は苦しげに息を吐きながら、

「もう、捕獲してしまうことにするわ」

「はっ？」

まさか、この状況で？ と、俺が耳を疑った時には、すでに、遅く。

パシャッと、何かの光が俺の視界を遮り、ピロリロリーンと携帯電話の写メを撮ったかのような音を聞いた瞬間、

「馬鹿、な」

気づけば、俺は暗黒の世界にいた。

真っ暗、本当に真っ暗な世界だ、上も下も、右も左もわからない真っ暗な世界。

そこにいたのは、

「……痛い」

そう言いながらも、どこか、嬉しそうな九条の姿。

「お前……どっちだ？」

俺の問いに、九条がニヤッと笑みを漏らすと、

「知美の方ですよ、ようこそ、影の世界へ」

この様子だと、破壊した部分は再生したか、

「どうなってる？ 俺の携帯電話は破壊したはずだろ」

「うん、でも、惜しかったですよ。正確には、私達の持っている携帯電話と干渉しちゃいけないですよ。あの携帯電話というか、『ドッペル・ナイト』は写メで撮った箇所をこちら側に引き込むことができます。壊すなら、私達の携帯を壊すべきでしたね」

本当に厄介な力だ、俺とは種類が違うようだが、『内面世界引きずり込み型』って、どこか……

「……、つまり、俺はどうなっているんだ？」

「肉体と影が入れ替わった状態ですね」

「つまり、今、あっちにいるのは」

「はい、あなたの影ですね。無抵抗の」

無抵抗を強調して言う知美、すると、上かはわからないが、頭上から、

『諦めなさい、このまま、あなたの影を移送します』

勝美の声がこの世界に響いた。俺はため息を吐く、向こう側の無

抵抗の影を移送すれば、影の世界に落とされた肉体である俺もそれに付いていくわけだ。

「まんまと捕まったわけか」

「そういうことです、あ、肉体ではこの影の世界には干渉できないから気を付けてね、私を殴っても無駄ですし、むしろ、海に潜ってしまったかのように動きづらいはずですよ」

知美の言うとおり、指一本動かすのにも、かなりの労力を必要とする。向こうの影を行動させることもできるが、無駄だな、こちらからは向こう側が確認できない。

「ここを破壊すれば」

「いいですけど、どのみち、勝美ちゃんにまた捕獲されますよ？

諦めましょうよ、目的地に着けば、出して上げますから」

「肉体と影を逆にさせたってことは、どうやって、影を移動させる気だ？」

肉体は影に触れられないと言った、だが、聞いた瞬間、

「こうするんです」

知美の右腕が消える、とすぐに、戻る。いや、違う。

「腕だけを、入れ替えたわけか」

「はい、私は向こう側は見えませんが、勝美ちゃんが指示してくれますから、私は勝美ちゃんの指示通りに握っていればいいんです」

恐らく、知美の右腕は、今頃、向こう側に体現したはずの俺の影を握っているはずだ。

「あ、怒ってます？ 私でよろしければ、存分に叱ってくださいって
も」

「断る」

これから、どこかへと着くまでにこの設定・M女の相手をしなければいけないのか、と思うとため息が漏れた。

まあ、早い話が、俺は結果として敗北したわけだ。

カワラズノセカイ

場所は、新川ポートアイランドと繋がった千葉県内のある建物の中。

そこで、私は、訊いた。

「これは、どういうことですか？」

目の前には、ろくに手入れもしないのに長い髪をしているため、年がら年中と言っているいいほど、髪がボサボサの女。その女は、少し髪をいじった後に、

「まあ、そう、怒らないでくれ、セラ。昨日、飲み過ぎてね。頭に響く」

頭を押さえて、気だるそうに答えるだけだ。

「……多賀谷シンパチには関わるな、とあれほど言ったはずです」

ここは、私が所属している組織の本社である。

そして、そのリーダーが目の前にいる女、名前は『室長』、あだ名やコードネームではなく、室長と言う名の女だ。

「とにかく、私も、多賀谷シンパチの家へ向かいます」

「あー、それは、許可できない。今の君は何をするかわからないからね。いいかい？ これは、命令だ。君はこの部屋を出るな」

「……」

室長はアナザーではないため私を捕縛する方法はない。この建物には、“仕掛け”が色々と張り巡らされているが、脱出して、多賀谷シンパチを助けに行くことは不可能ではない。

「いい加減に諦めろ、セラ」

ドアの前に立つこの女さえ、いなければ、

私はその女を睨み付ける。

腰まで流れるワインレッドの髪を後ろで一本に結い、墨汁で染めたような黒い包帯で両目を覆った女、服は黒い洋風のドレスで髑髏柄のレースが付いており、左手には鉄製の杖、そして、右腰にはズ

シリと重みのある刀が下げられている。

カラナ・ガルデラ、私と同じ、ここに所属している者でアナザーの一人。

「カラナ君の言うとおりだな」

その後ろから扉を開いて現れたのは、白髪で体格のいい男、服装はスーツ姿だが、神父服でも着せれば似合いそうな姿で、実際、一般人であろうと罪人相手だろうと誰の目の前でも笑顔を絶やさぬ男。この組織の副リーダー格だが、アナザーではない。

「彼だけを特別扱いにするわけにはいかない、例えば、君が責任をもって監視するとは言ってもだ。まあ、自分の責任で彼を巻き込んでしまったことを悔いるのはわかるが、事件が起きている以上、もはや、討論する余裕はない、彼は我々の監視下におかねばならん」

「あの人は、そんなことをする人ではありません」

「失笑、セラ。あなた、あいつと会って、何日目だ？ 一週間どころか三日も経っていない、それで、人を判断するのは不可能。ましてや、相手はアナザーとなれば」

「それでも、彼はやっていない」

目は見えないが、カラナはこちらを見ているはずだ、カラナの見えざる目と睨み合うこと数秒。

「やめたまえ」

いつの間にか、飲み物を取り出して飲んでいる室長。恐らく、デスクの下に隠してあるつもりの冷蔵庫から取り出したのだろう。

「室長、それは酒ではないだろうな」

「安心したまえ、一応は仕事中だからな。これは、アルコールの入ったミネラルウォーターだよ」

「世間一般的にそれを水割りと言うのだ」

「そんなことはどうでもいいのです、カラナがここにいるということとは彼を迎えに行ったのは、九条ですか？」

「ああ、彼女なら力を調べることに適任だ。危険な相手であろうと奇天烈な力を使おうと、隙さえ突けば捕獲が可能だからね」

「力を調べる……と言いましたか？」

私はその意味をよく知っている、それは、アナザー同士で殺し合わせるという意味だ。どちらに転んで、結果、アナザーの数が減っても、増えても、彼らにとっては問題ない、何故なら、上の連中に言わせれば、味方であろうとアナザーは邪魔者に過ぎないからだ。

私が腰にかかった拳銃に触れると、背後で、カラナが刀を握る、左手は杖を突いたまま、右手で刀を握っただけ、構えも何も無い、小学生が新聞紙を丸めて刀にして持っているような未熟な持ち方。

だが、それでも、動けない。彼女の力量はわかっている、ゆえに今は動いてはいけない、この距離は彼女の間合い、しかも、部屋が狭すぎる。

「やれやれ、身内の争いはなしだ。それに、セラも安心していい、先ほど連絡があった。多賀谷シンパチは九条の『ドッペル・ナイト』を一度は打ち破って、今は五体満足でこちらへと連行されている最中だ」

「それは、本当ですか？」

「味方に嘘を吐いてどうなる？」

本当かどうかは疑わしいが、一先ずはホッとする、九条の、特に知美の方の性格は危険だ。あの子は叱られるためなら、人間を切り刻むことすら平然とする、勝美という制御装置がいなければ、今頃は、牢獄か、地獄かのどちらかにぶち込まれていてもおかしくはない。

「しかし、興味深いことを聞いたぞ。何でも、彼のアナザーは、九条の影の世界まで破壊したらしい。いきなり、『ビジョン』を使ったことも考えると、わずか、数日でここまでアナザーの力を発揮できるものかな、セラ？」

室長の寝ぼけた眼差しがこちらへと向けられる。だが、その瞳の奥の光はまるで、胸の中の闇を見透かそうとするほど鋭い。

「そのことならば、甲崎信吾もまた、わずか一週間程で、我らと同等の力を身につけていました。懸念するほどのことではないかと」

「ふふ、それもそうだね。あの甲崎君だっけ？ 彼は才能があったみたいだね。仲間に迎え入れられずに残念だよ。ああ、それと、少し、興味深いデータを手に入れてね。彼、ああ、多賀谷シンパチ君のことだけど、彼は『東京崩壊地震』の際に、例の崩壊ポイントにいたらしいよ。そこで、母を失い、怪我をしてから親戚の家に預けられているが、うん、担当医の話だと、一部だが記憶障害が診られたらしいね。まあ、子供の頃だ。嫌な記憶は胸にしまっておいたのかな」

多賀谷シンパチの資料をめくりながら、関心があるのか、ないのかわからない口調で語る室長。

「東京崩壊地震？ 室長、確か、それはガセだったはずだが？」

カラナの問いに室長は頷き、

「ああ、ガセだよ、ガセでなければ、ここも無事であるはずがない」
東京崩壊地震、過去に掲示板で話題になった一件だ。ある日、東京都の地震計測器が測定不可能な数値を察知し、それに、慌てた気象庁は東京から隣接する県全てに避難命令が出されて騒動になった事件だ、結局、地震は起きたが、震度は3、怪我人の数はむしろ、避難命令で慌てて逃げ出して怪我をした数の方が圧倒的に多かったとか、何より、この地震、おかしい点があり、本来は発生後に観測できるはずの地震が発生前に観測できたという点である。

まるで、世界の崩壊を予知したかのように、しかし、結局のところは掲示板のネタになるだけの事件でしかなかった、崩壊ポイントとは、その地震の震源地のことである。

その時、静まり返った部屋にノックの音が響き渡った。

「おや？ 誰かな？」

部屋が開かれると、そこには、誰の姿もない。否、視線を下に向ければ、小学生くらいの少女が顔を覗かせている。

「あのー、九条さんがお帰りになったようですよ？」

「ああ、白井さん、知らせてくれてありがとう。お仕事に戻ってくれ」

「はい」

室長の言葉に少女は頷くと、部屋の扉を閉めた。トテトテと、少女の足音が遠ざかる音が部屋に響き、次に、少し大きめの足音がこちらへと近づいてくる。

部屋の扉が再び、開かれると、そこには、眼鏡を外している九条勝美の姿、その片腕は途中で途切れるとその先は黒色に染まり、その手が掴んでいるのは、男の影。

影が部屋に転がされると、九条が携帯を操作、瞬間、

「ッ、眩し、ここは、どこだ？」

影と入れ替わったのは、当然、眩しさに目を細めた多賀谷シンパチ。

「シンパチ、申し訳ありません」

彼の姿を見て、私は素直に謝罪する、もはや、彼を巻き込まないわけにはいかないらしい。

「セラ……だとしたら、ここは」

シンパチが警戒の色を強くし周囲を見渡した後、視線を向けたのは、椅子にもたれ掛かった、この組織のリーダー。

室長は口の端をつり上げると、シンパチへと告げる。

「ようこそ、多賀谷シンパチ君。世界政府直属、アナザー対策室『カワラズノセカイ』へ」

カワラズノセカイ2

九条の影の中に閉じ込められ、十分程経った時だ。

「着きましたよ」

と、知美が告げると共に、浮かび上がるような感覚が体を支配すると、長いトンネルを抜けた時のように視界に光が飛び込んできた。暗闇に慣れた目に光は有毒でしかない、眩しさに目を細め、ようやく慣れると、そこには、セラの姿。

それから、周囲を見渡すと、そこは一見すると普通の事務所で、いきなり独房や取調室みたいな場所でなかったため、安心する。

後ろには、ディープに赤い髪と墨のような黒い包帯で目を覆った女、その隣には九条と白髪の男。

そして、前には、気だるそうにデスクに腰掛けたボサボサ髪の女、その女は口を開くと、

「ようこそ、多賀谷シンパチ君。世界政府直属、アナザー対策室『カワラズノセカイ』へ」

「カワラズノセカイ？」

「そうだよ、君も予想していたかもしれないが、世界政府がアナザー対策のために秘密裏に造り上げた組織さ。まあ、表舞台に立つ予定は今のところないけどね」

「あんたは？」

「室長と呼んでくれ、名前はとうの昔に捨ててしまったね。一応、こここのトップになるかな」

「……で？ 俺がここに連れてこられたのは、早朝の事件のことか？」

性急だね、と室長は笑うと、

「じゃあ、訊くけど、君、この事件の犯人かい？」

くだらない質問をしてきた。俺は犯人ではないが、例え、俺が犯人であろうと、はい、そうですとは答えないだろう。

馬鹿か、こいつはと胸の中で思いながら答える。

「俺は何もしていない」

「そうだろうね、君が犯人でないことはもう証明されている。九条君からの報告を聞いて君のアナザーの力を確認したが、君が犯人でないことは明らかだ」

「何だと？」

だったら、どうして、俺はここに連れてこられたのだ？

疑問が顔に出たのか、室長は俺の顔を見ると、指を三本立てて俺に見せる。

「君をここに呼んだ理由は三つ。一つは、“管理”するためだ。人となりを見極めて起きたかったんでね」

「管理ってのは、具体的に？」

「その前に、アナザーのことを説明しておくべきだね。アナザーというのはね、世界を変える力なんだ」

「それは知ってる」

今更だな、と思いつながら答えると、

「で、この力だけど、当然一般人から言わせれば、ただの危険な力でしかない。危険は排除するか、誰かがちゃんと嚴重に管理するかしないといけないわけだ」

「つまり、俺を牢獄にでもぶち込むのか？」

「いや、そんなことはしない。君が……そうだな、世界を支配しようとか、この世界を自分色に染めてやろうとか、考えないかぎり、こちらは何もしないよ。まあ、いくつかの書類に何も言わずにサインしてくれればいい」

「何だ、そりゃ？」

何も言わずに書類にサインという言葉は怪しすぎるが、それ以上に、ある疑問が思い浮かんだ。

「うん？ 理解できないかい？ これは、普通のことなんだけどね？ 誰だって世界を創り変える力があったら、自分好みの世界にしようと思うだろ？」

「違う、俺が言っているのは、規模の問題だ。世界？ 随分とでかすぎやしないか？」

たかが、街一つで起きているような事件が世界を変える程に大きくなるんでも言うのか？

「ああ、ああ、そうか、君はまだアナザーの力を完全に把握していないんだね。そうだな、まず、アナザーは成長することを君は知っているかい？」

「成長？」

「そう、まあ、進化って言うのかな？ まあ、方法は色々あるんだけど、その一つに……あ、君、感世者Bのことは知らないのかな？」

「感世者B……セラの口から聞いたことがあるくらいか」

初めてセラと会った時、セラは、確か、俺を追ってきていた甲崎の部下らしき奴らをそう呼んだはずだ。

「感世者Bってのはね、そのまま、流される者であるノーマルがアナザーの世界の干渉を受けて、その世界に飲み込まれた者のことを言うんだ」

「世界に、飲み込まれる？」

「そう、アナザーの持つ別世界の一部になるの。だから、感世者Bは自分の主であるアナザーから与えられた命令に忠実でね、一部だが、アナザーの力や身体能力の向上も見られるんだ。

そうだ、吸血鬼って知ってる？ 一般的な定義では吸血鬼が血を吸うと、吸われた一般人はグールになって、身体能力やら、不完全な不死の力を持つよね。あれと同じ、アナザーの別世界の常識というウイルスが感染する、だから、感世者Bって言うの」

「……で？ その感世者Bがどうしたんだ？」

「まあ、当然、一般人にだって世界を変える力はあるわけだよ。アナザーには、世界を変える力を吸収することができるというより、他人の世界を食い尽くす性質がある。だから、アナザーは感世者Bを創ると、当然、その世界を変える力も吸収してしまうわけだ。だ

から、強力になる、ついでに、感世者Bという手下も得る。

吸収された力は感世者Bが死んでももう関係ないんだよね。魂を奪われたって言うのかな？ 中には、感世者Bをメインとして扱うアナザーもいたりするんだけど、君は、見た所、感世者Bを生み出すタイプではないね」

「生み出し方なんて知らないからな」

俺が答えると、室長は念を押すようにして俺を指差した。

「そこ、そこだよ。今回の事件ね、どうやら、殺されたあの教師さん、感世者Bだったようなんだよね。だから、君は違うという予想したわけだ。まあ、今はそんなこといいんだけど、もう一つ。

これ、君をここに呼んだ理由の二つ目だから、ちゃんと聞いてね。さっき、世界を変える力って言ったよね、それは当然、ノーマルよりもアナザーの方が強いんだ、桁違いって言うほど」

「なるほどな、つまり、アナザーはアナザーに狙われるってわけか、俺を呼んだ二つ目の理由は、“保護”か」

「そう、アナザー同士だと、互いに別世界の常識を持つ者同士だからね。感世者Bにすることはできないけど、その力を奪うことはできるんだ。まあ、そんなわけで、アナザーの中にはアナザーを狙う輩も少なくない。

上は殺し合ってくれるなら本望って方針だけど、そうもいかないからね。アナザー同士の争いなんて世界と世界のぶつかり合い、単純に抗争って言うてもいい、そうしたら、一般人にも犠牲がいっぱい出るからね。それが、強力なアナザーになると、それこそ、世界の危機だよ。ああ、それと、アナザーの力が奪われた場合、当然、そのアナザーにはそれ相応のリスクが訪れるから注意してくれ」

つまり、アナザーは世界を変える力とやらを吸収できるというところか、そして、逆にそれを奪われたアナザーはただではすまない、恐らく、死ぬか、廃人になるかって所だろう。

「まあ、何となく、話はわかった。で？ 三つ目は何だ？」

実は、三つ目に関しては、予想ができていた。恐らく、俺の予想

が正しければ、

「うん、三つ目は、“交渉”……契約というか、仲間になってくれないかって話だよ。アナザーは最近、急激に増え始めたんだけど、誰もかれも犯罪にはしちゃって、君は、久々にまともに話し合いができそうな相手なんだよね」

やはり、俺の予想通りだった。力を調べるのに戦わせるのは、もしも、駒にした時に使い物になるかどうかを測る試験でもあったわけだ、そうでなければ、もっと、いい方法があるはずだからな。

そして、俺の答えはもう決まっている。

「断る。誰かの命令を聞くのなんてまっぴらだからな」

「まあ、そう言うとは思ったけどね」

室長は苦笑い、俺の横でセラはどこかホッとしたような表情をした。

「うーん、条件は悪くないんだけどね？ 給料も出るし」

「どうせ、組織が許す限りなら世界を変えることを許すとか、望みをお前らが可能な範囲で叶えるとか、その程度だろ？」

俺の指摘に、室長はにへらと笑い。

「その通りだ」

「なら、なおさらご免だ。どっかの誰かが世界の支配者になろうと俺には関係ない。俺に関わりさえしなればな。何より……」

「何より？」

「俺には、望む世界なんてのはないからな」

俺は本心からそう言うと、それを聞いた室内の者達は赤い髪的女生以外は驚いているようだった。

だが、本当のことだ。俺には夢や望みがない、そんなものはいらないし、例え、世界を好きにしていると言われたら、何もないから、ただ、世界が壊れていくのを見ているしかない。

俺は世界の王にはなれない、俺がなれるのは瓦礫の王だけだ。

だが、その時、室長と言う女の目つきが一瞬、鋭くなったように感じた。

「まあ、そうだろうね」

そして、小さく何かを呟いた、しかし、口元を隠しており、よく聞こえないし、口の動きも見えなかった。

「今、何か言ったか？」

「いえ、お気になさらずに」

にいつと室長が誤魔化すように笑む。

……と、そこで、俺はセラと目が合った。

セラは、俺の答えに不満でもあったのか、少し、怒っているように思える。

不機嫌になるようなことでも言っただろうか？　と考え、思い出したのは、セラと初めて会った時のこと。

ああ、そうだ、俺には、それがあるではないか。

望む世界なんてないけれど、今、猛烈に欲しい物がある。

「待て、そうだな、今回のこの件が解決するまでなら、協力してやつてもいい。ただし、対等の立場でだ」

「ほう、また、急だね？」

「それと金もいらない」

金なんてあっても使い道がない、人形を買う金は仕送りで事足りているからだ。

ただ、その代わり、命をかける代わりに、金以上の物を俺は要求する。

「今回の件が終わったら、俺はセラをもらう。それが、条件だ」

俺の言葉に、室長の目が丸くなる。

「セラを？」

「し、シンパチ？」

セラが慌てた様子で俺を見るが、

「あの時、言っただけだ。俺がセラが欲しいってな」

「馬鹿な、アンドロイド一体にいくらかかると……しかも、彼女は

特別製だ」

室長が何かを言う前に、俺の背後から白髪も男が声を漏らす、口調は荒いが、その表情は穏やかなままだった。

「……今回の件、あんたらも苦戦しているんじゃないか？」

「何？」

「まず、今回の事件、随分前から起こってる誘拐事件と関わり合いがあるんじゃないか？ それに、今日の件をパソで調べた時、この付近で起きている事件がやけに多かった。あんた達だけじゃ、処理できていない証拠だ」

それは、『NEXT』に記載されていた情報である、詳しく調べていると、新川だけでなく、この付近で誘拐事件など、謎の事件が多発しており、どれも、解決されていないようだった。

そして、今回の事件がそれに関係している可能性は十分にある。

室長と睨み合うこと数秒、ため息を吐いたのは室長だ。

「……その通りだ。最近、この付近で何かを企てているアナザーがいる、今回の事件もその一つの仕業の可能性が高い」

甲崎や俺に対する行動から考えても、この組織の情報量や権限はかなり大きい、それに抵抗できるほどのアナザーがいるということ、だからこそ、こいつらも戦力が欲しいはずなのだ。

「いいだろう、その条件、飲もう」

「セラの意志は聞かないのか？」

「セラの意志？ 彼女は我々の所有物だ。意志を聞く必要が？」

「当たり前だ」

素材・肉如きにセラの意志の決定権があるのは、はらわたが煮えくり返る程むかつくが、俺がセラを手に入ればいいだけのことだ。俺の答えに室長は苦笑する。

先ほどから白髪の男は何か言いたげだったが、室長とアイコンタクトすると黙り込んだ。

「し、シンパチ、本気ですか？」

「俺はいつでも本気だ」

俺の返答にセラは言葉を詰まらせるも、

「う、嬉しいですけど、シンパチは馬鹿です」

嬉しいのか、恥ずかしいのか、怒っているのか、ムスツとした顔でもじもじと指を交わらせていた。

「まあ、どのみち、この事件の間に多賀谷君が死んだら元も子もないしね」

「……まあな」

自分でも、今からどういう世界に首を突っ込もうとしているのかはわかってる。

だが、本当にそのアナザーが何かをしようとしているのなら、新川に住んでいる俺と関わる可能性は高く、どのみち、相まみえると思われる。

なら、その時に一人だとまずい。ならば、ここはこいつらを利用した方がいい、何より――

セラを手に入れるチャンスが、到来したのだから。

「じゃあ、事件の詳細に付いて話そうか、とりあえず、今回、裏で動いているアナザーを我々はこう呼んでいる」

重々しく開かれた室長の口から、相手のアナザーの名前が紡がれる。

「『MOTHER』、それが、我々が追っているくそったれの名前だよ」

カワラズノセカイ3

いくつかの書類を何も言わずにサインした後、室長は事件の詳細に付いて語り出した。

誘拐事件が始まったのは、およそ、二ヶ月前、一番初めの犠牲者は、新川に住む学生だったらしい、その学生は、“自分の家”で友達と遊んでいる時に急に立ち上がると「ぼく、お家に帰らなきゃ」と言い出して、自分の家を飛び出したとのこと、その後、その少年は家に帰ってこず、それが、この事件の始まりだった。

その後も、似たような謎の行方不明事件は続き、今では、およそ、百数人の人間が行方不明になっているとか、

「目的がわからんな」

「だから、何かを企んでいると言っているだろう？ 単純に自分のアナザーを強化しているだけかもしれないがね」

「それにしても、それだけの人数が行方不明になっているのに、世間は騒がないんだな。これも、あんたらの仕業か？」

俺の問いに、室長は首を横に振る。

「いや、違うよ。アナザーが関する事件は、どれもノーマル達には理解できないんだ。それが、どれだけ大きな事件でも「あー、何か起きているな」程度の認識でしかない。たまに、意志が強いノーマルなどは、何かがおかしいと思うけれど、行動に移せるわけでもないからね。そういうノーマルは大物になれる素質があるのかもね」
確かに、俺も、アナザーに目覚めるまでは、この事件に関して無関心だったが、改めて考えると、百数人の行方不明者など大事件である。

「今回の事件、似たような事件が、ある村で起きていたんだけどね。『神隠し症候群』って言って、村の中で病気のように行方不明者が広まっていて、村が一つ無くなっただけ。村が一つなくなっても、世間はこの異常性には気づいていない。まあ、さすがにそ

の時は多少の騒ぎになったけれどね、周囲の街や村だけと、事件の規模に比べれば、小さな騒ぎだった」

俺も、そんな話は今、初めて聞いた。俺が思っている以上に、アナザーというのは、世界に影響を与え始めているということか、しかも、知らず知らずのうちに。

「まあ、隠蔽の必要がないのは楽だけど、このまま、放っておいたら、本当に大きな問題が起きて、政府は追い詰められるだろうね。」

この国は無神論者の宝庫だからいいけど、海外じゃ、宗教集団が問題になり始めている。彼らは最も多い、大きな別常識の所持者達の組織だからね、アナザーに目覚める者が多いんだ」

「なるほどな、目的は、神様の復活とかその辺りか」

「そうだろうね、この世に神がいろいろといまいと、アナザーの力なら、いるなら降臨させることも、いなくても、彼らの信仰心が本当の神を創り出すだろうさ。うん、放っておいたら、各国の神々が戦い、宇宙人が襲来して、妖怪と友達になれるような世界が生まれかねない」

そんなことになれば世界はただ滅ぶだけだな、と心中でため息を吐く。

「そんないつ起きるかもわからない神災の話はいいんだ。小さな事件の話に戻ろうぜ」

「つれないね、MOTHERの話に戻ると、教師が泥を詰め込んだ事件だが、君はママゴトを知っているかね？」

「……ママゴト？」

どう関係があるのか、と聞き返すと、

「これは、ニュースでは流れていない情報だけど、亡くなった教師だけどね、食べていたのは、泥ではなく、泥団子だったらしい」

「泥団子？」

泥も泥団子も一緒だろう、泥は団子にしても食べられない。

「だから、ママゴトなんだよ、警察は関心を示していないが、実況見分では、食べ残しの泥団子が三つあったという。犯行当時は誰も

いなかったが、その前に、誰かが泥団子を作って、彼に与えたんだろ」

「それは何か？ グラウンドの中心であいつらはママゴトをしていたと」

「もしくは、MOTHERの力がママゴトを起源にしているのかもね。どのみち、泥を食べたら人は死ぬ、理由は知らないが、MOTHERは教師を殺すつもりだったんだろ」

警察は自殺と判断するだろうね、と室長が付け加える。

「恐らく、MOTHERにご飯をたくさん食べるとでも命令されたんじゃないか？ ママゴトのママは母ではなく飯という意味だし」

「アナザーってのは、すごいのか、すごくないのか、わからんな」

「どうだろう、MOTHERに戦う力はないだけかもしれない」

なるほど、確かに、どういつもこいつも甲崎のように戦うことを目的にしているとは限らないか。

「……で？ これから、俺はどうすればいい？」

「とりあえず、指示は必要になった時に伝えるよ。それまでは、今まで通りに過ごしてくれて構わない」

「ふん、今まで通りね」

そりゃあ、もう無理だろ、と思ったが口には出さなかった。室長もそのことは理解しているだろうし、セラは、俺を巻き込んだことを後悔しているんだから。

「さて、セラと九条にはまだ仕事がある。カラナは、今日はもう上がっていいから、ついでに、彼を送っていつてくれないか？」

言われてみれば、ここまでの道順を俺は知らない。案内が必要だが、

「それなら、私が」

「残念だが、セラには頼みたいことがある」

セラは不満げな顔をするも、渋々従うようだ。

だとしたら、俺を案内するのは、

「カラナ・ガルデラ、よろしく」

この赤い髪の女か、物腰の落ち着いた雰囲気のある奴だが、その手には、杖がある。

「目が見えないのか？」

「ああ、生まれつきな。だが、安心してくれ、他にもう一人、一緒に案内する者がいるから、外で待ってしよう」

その言葉に頷き、俺はそのまま事務所を後にした。

外に出ると、久々の日光と新鮮な空気に俺は満足する。

杖を突いたカラナは少し遅れて外に出てくると、

「あつ……」

「なっ……」

カラナが足を踏み外し、その場に倒れ込みそうになる。そして、その転ける軌道の先にいるのは俺だ。

仕方なく、倒れ込むカラナの体を支える、雰囲気は重い女だが、それでも、体は華奢で、軽かったため、支えるのは楽だった。

「す、すまない」

「気を付けろ」

言って、俺は手を離す、だが、カラナがしゃがみ込んだまま動かない。

「どうした？」

「杖が……ない」

見れば、杖はカラナの足下に落ちている。

「下だ」

俺が言うと、カラナはそのまま、立ち上がり様にそれを拾おうとして、

カランツと、杖を蹴り飛ばした。

「……」

「……」

慌てて、その音の方へとカラナが行こうとすると、そこには、通行人がいてぶつかってしまう。

「あ、す、すまない」

その通行人は迷惑そうにカラナを一瞥した後、そのまま、去って行ってしまふ。

「……」

何だか、その光景を見てむかついてきた。

初めから俺が杖を拾えばよかった、と思いながら、俺が歩いていくと、カラナがまた誰かとぶつかってしまふ。

「す、すまな」

「いてえな！ おい」

だが、先ほどの奴とは違い、今度のぶつかった相手は迷惑そうにカラナに突っかかってくる。

「邪魔だつての！」

「ッ」

そして、通行人はカラナの肩をドンツと叩き、無理矢理にどかして先に進んでいく。

これだから、素材・肉は――

「おい、待て」

その背中に、俺は声を投げかけた。

「あん？」

「見りゃわかんだろ、病気かどうかはわからないにしても、目が見えてないんだ。そこまでする必要があるのか？」

「はあ？ こいつ、お前の連れか？」

男が聞いてくる。連れでないなら「関係ないだろ」、連れだったら「連れならちゃんと見てろ」と文句を言うつもりなのだろうが、

「いや、全然違う。単純に、お前がむかつくんだよ」

俺のどちらでもない言葉に男はたじろいだ、俺は男を睨み付け、一歩、近づく。

「謝れとは言わないさ、俺には関係のないことだからな。だが、このままいけば、俺は不快なお前をミンチにするかもしれない。俺を不快にさせない方法は言わなくてもわかるだろう？」

「ッ、意味わかんね。悪かった、悪かったよ、これで、いいだろ」
面倒になるのを嫌ったか、男は吐き捨てると、人混みに紛れて去って行ってしまう。一発くらいぶん殴っておけばよかったか？

「ったく」

杖を拾い上げ、カラナに手渡すと、

「あ、ありがとう」

「別に、あいつが勝手に謝っただけだろ」

しかし、この女、見た目や雰囲気反して、呆れるくらいに間が抜けている。

「ほら、こっちこい、そこにいたら、またぶつかる」

「あ、はい」

カラナの手を引くと、促されるままにカラナは付いてくる、そのまま道路の端に來ると、

「ふふ」

カラナが微笑みだした。

「何がおかしい」

「いえ、いい人だな、君は」

「はあっ？ ただの気まぐれだ」

一度、助けてやったくらいで何を言っているんだ、こいつは。

「なら、尚更だ。気まぐれで人を救えるのなら、君はすごい人だ」

だが、嫌味もお世辞もなく面と向かってそう言われたため、思わず舌打ちが出る。

「チッ、あんたも、ここのアナザーなんだろう？ そんなに鈍くさくて大丈夫なのかよ？」

「すまない、目が見えずとも、人の動きなどは気でわかるのだが、どうも、日常生活にいつまで経っても慣れなくて。よく、間が抜けていると言われる」

少し、眉をひそめる。日常生活に慣れない？ それは、前までどこか、普通の環境ではない場所にいたということだ。名前や容姿からも、異国の人間であることはわかるが、無理矢理連れてこられた

のではあるまいな？

「まあ、一緒に生活している子がいるから問題はない」

「あの子？」

それが、先ほど言っていたもう一人の案内人だろうか？ と、考えていたその時、

「あー！ その人が新しいアナザーさん？」

子供特有の高い声を出す一人の少女が、カワラズノセカイの建物から出てきた。

「誰だ？」

「白井ミナ、アナザーだが、戦闘員じゃない。両親も失っていて。私と一緒に暮らしているんだ」

「おいおい、じゃあ、もう一人の案内人って、これか？」

鈍くさい盲目の女に、子供……案内人としてこれほど頼りのないコンビはいるだろうか？

「初めまして、白井ミナです。カワラズノセカイじゃ、雑務をしています。お掃除が得意です」

「……こんなガキに働かせてんのか？」

アナザーとは聞いても、どう見ても、小学生だ。こんな子供に働かせるほどこの組織は人材が不足しているのだろうか？

だが、カラナは首を振ると、

「いや、彼女はこれでも、もう二十歳だよ」

……鈍くさいかと思っていたが、どうやら、天然度級の馬鹿だったようだ。二十歳と言えば、酒やタバコが吸える歳、こんなのが居酒屋に行ったり、タバコを買おうとしたら、止められるに決まっている。

だが、カラナの表情は真剣で、

「冗談だろ？」

俺が白井に視線を向けるが、白井は何のこっちゃ？ と首を傾げるだけだった。

「……そういうアナザーなんだ、知識は蓄えられるのに、肉体と精

神が成長しない。こうなると、アナザーも病気の一種だと認識させられるよ」

肉体と精神が成長しない？ 精神はともかく、肉体が成長しないということは。

「……不老のアナザーってわけか」

アナザーってのは、そこまで可能にするのか、少しだけ、アナザーという単語の恐ろしさというものを知った気がする。

「それだけじゃないけどね」

それだけじゃないということは、まだ、何かあるのか？ と首を傾げ、そこで気が付いた。

遠目には見えなかったが、白井は何か、白く、頭が丸い、赤いビ―玉のような目をして、白い翼の生えたぬいぐるみを持っていることに。

「何だ、それ？」

と、俺がそれに触れようとすると、

「待て！」

俺がそれに触ろうとする気配を察知したのか、カラナが後ろから声を上げる、しかし、もう遅い。

すでに、俺はそのぬいぐるみに触れていた。

そして、ぬいぐるみが身震いを始め、

……

「何も、起きないぞ？」

何か危険なアナザーだったのだろうか？ と一瞬、冷汗が出たが、特に何も起きない。

すると、身震いしただけのぬいぐるみが突然動き出す、そう、ぬいぐるみが動き出した。もぞもぞと、白井の腕から抜け出すと、そのまま、白井の頭の上に乗っかる。

「生きてる、のか？」

「あは、この子は、パクちゃんだよ」

「パク？」

「うん、この子はね、天使なの」

「天使？」

この少女は少女で意味がわからない、天使って……夢見る少女と言えば聞こえは良いが、実は二十歳と思うと複雑になる。

しかし、天使の姿をしたアナザーなのかもしれないと、勝手に判断していると、

「何も起きなかったようだな」

よかった、とカラナが息を吐く。

「あれは、あの子のアナザーなのか？」

「確かに、パクはあの子を守っているが、正確には、彼女のアナザーではない」

「正確には？」

「あの子のアナザー名は『天使を待つ丘』って言うんだ。あの子は、ある理由から天使を待っていて、その力がアナザーになったんだ。でも、この力はね、天使を待つ場所であって、自分で生み出すわけじゃない」

カラナの説明を聞いて、それを思い付いた俺は、馬鹿らしいと思いつきながらも息を呑む。それは、つまり。

「あの、丸いのが本物の天使だってことか？」

「室長の話だと、ありえない話ではないそうだ。あの子は、白井のアナザーに惹かれてきたみたいで、懷いて離れない。それで、白井にやましい気持ちを持つ者が近づくと、排除しようとする」

それで、ここまで、十数人は病院送りになったとカラナは説明する。だが、そこで、一つの重要な疑問が思い浮かんだ。

「待て、お前が俺を止めたということは、お前は俺があいつにやましい気持ちを持って近づいていると思ったのか？」

「い、いや、違う。ただ、人形好きと聞いたから、あれだ、そっちの趣味もあるかと」

「ふざけんな！俺にロリコンの趣味はない」

「そ、そうなのか？」

「ああ、まあ、子供ってのは人形好きだから嫌いじゃないが、俺をそっち方面と勘違いするんじゃない」

「あっ、お兄ちゃん、お人形が好きなの？」

と、カラナの誤解を解いていると、白井が話の間に割って入ってくる、まあ、天使が反応しなかったことがその証明なわけだし、気にしなくてもいいか。

「まあな……」

「あたしもいっぱい家にあるよ！　ぬいぐるみだけど」

「ぬいぐるみか、家にいくつかあるな。いるならやるよ」

ぬいぐるみは俺の専門ではないのだが、家には、島崎や三宅とゲームセンターに行った時に取ったぬいぐるみがたくさんある。

「本当！？」

「ああ、ただ、大切にしろよ」

「うんうん！　あたし、クマさんがいいな」

「テディベアか、ぬいぐるみの基本だな、家に二つくらいあったかな？　素材次第で値段が跳ね上がるし、本場になると、学生じゃ手が出ないからなあ、家にあるのは、それほどの物じゃないんだが、それでいいか？」

「え、えと……可愛いなら問題ないよ！」

困った風に微笑みながら答える白井に、俺はうんうんと頷く、
「そうだな、値段よりも愛着が大事だな。いいだろう、今度、持ってきてやる」

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「よかったな、白井」

抱きつかんばかりの勢いで喜ぶ白井とそれを微笑ましそうに見るカラナ、約束して、ようやく、三人で帰り始めるが、その道中も、カラナはふらふらして危なっかしいので、俺が先導する羽目になった。

そして、ようやく駅に着く頃には、何故か、疲れている俺がいた。
(やれやれだ)

どうもこの二人にペースが乱されてしまったな、と俺は頭を掻きながら、駅に入っていく、

「またね！ お兄ちゃん！」

「ああ！」

「お気をつけて！」

「お前がな！」

二人の別れの挨拶に答えて、俺は改札口を通っていく。

MOTHER

暗い室内、そこに、私は帰ってきた。

……部屋の唯一の明かりは、電源の入れられたパソコンだけだ。

そして、そのパソコンの明かりに照らされて、彼女達が私の目に映る。

まるで、人形のように壁にもたれかかった五人の女性、その目はパソコンの明かりをただ反射するだけで、そこに生気の光は見受けられない。

彼女達は、私の世界に感世した者達だ。名付けるならば『ベビーシッター』、彼女達は私の指示に従い、ただ、“その子達”を育てている。

目や鼻はなく、小さな歯が生えた口だけがある、白く、細長い生物。

この生物は私やベビーシッター以外には世話ができない、そのため、私の世界に感世したベビーシッターは毎日この場所でそれに餌を与え続けている、本当ならば私が世話をしたいところだが、私には用事があるため、彼女達を利用している。

あの人から聞いたカワラズノセカイという組織は、私のことを『MOTHER』と呼んでいるらしい、私も、自分の世界のことをそう名付けることにした。

と、その時、この部屋の扉がノックされる、どうやら、あの人が出来たようだ。

「やあ、調子はどうだい？」

扉が開かれ、外の明かりが室内に飛び込む、そこにいたのは若い男。

「問題ないわ」

私は、パソコンへと視線を向ける。そこに表示されているデータ

は、ベビーシッター達が育てている『パラサイト・ベビーズ』が寄生している者達のリストだ。

パラサイト・ベビーズ、それが、私のアナザーの力。

この子達に寄生された者は私の子供になる、発動させれば母である私の命令だけを聞き、母である私を命を賭して守ろうとする。

「そういえば、ニュースを見たよ。上手くやったようだね」

思い出したように男が聞いてくる。

恐らく、先日 の 事件 の こと だろう。

「……別に」

私はチラリと男を睨むように見た後、視線をパソコンへと戻した。そこには、泥を食べて窒息死した教師の名前が表示されており、その横に、白い文字でロストと入力されている。

ポロポロと涙が溢れて、慌てて、私はその涙を拭いた。

「悲しんでいるのかい？」

「子供が死んで悲しまない母はいないわ」

「自分で殺したくせに」

「あなたが命令したんでしょ？」

「必要だったんだよ、多少の犠牲は覚悟の上だろ？ まあいい、こっちを向いてごらん？」

言われるがままに、私は男を見る。男の手が私の頭の上に置かれると、ふわっと、眠気にも似た違和感が私を襲う。

「……」

まるで、麻薬のような心地よさが体を支配し、思考が空白に覆われる、何も考えられなくなって、心の靄がスツと引いていく、男が手を離すと、

「どうだい？ まだ、悲しいかい？」

「……悲しい？ 私が？」

あれ？ 今まで、私はこの男と何を話していたのだろうか？

手には涙を拭ったような跡があるが、アクビでもしたのかもしれない。

何か、忘れていた気がするのに、思い出せない。

そうして、呆然としてみると、男が微笑んだ。

「いや、何でもないよ。それよりも、計画の話をしよう。例の件だ」
「ああ、新しいアナザーの話ね、それなら、まだ見つけられていないわ」

「あの人工林が燃えた事件、アナザーが起こした事件で間違いないのだが……」

「気にしなくてもいいんじゃない？」

「そうもいかない、不安定要素は全て、取り除いておくべきだ」

「カワラズノセカイに倒されたのかも」

「ありえない話ではないが……逆にそいつがカワラズノセカイに協力することもあり得る」

だが、どのみち、見つけなければ手の打ちようがない。それは、男もわかっているのだろう、一度、ため息を吐くと、

「まあいい、どのみち、カワラズノセカイとは近いうちに接触する予定なんだ。そちらを優先しよう」

その言葉に私は頷いた、否、頷くしかなかった。

私は、何故か、この男の命令を拒否できない、拒否するという事柄を忘れてしまうのだ、それがどんなに嫌なことでも、賛成した後で、否定するのを忘れていたことを思い出す。

駄目だ、止めよう。きっと、無駄なのだ。恐らく、それが、この男のアナザーの力で、すでに私はそれから逃れられなくなっている。「そうだ、この計画が成功したら、式を挙げよう、きっと、みんな祝福してくれるよ」

男が私の頬を撫でる。式、結婚、私はこの男のことが好きなのだろうか？

だが、その思考も意味がない、否定しようにも否定できない、言葉でも、体でも。

もう、私はこの男の命令を聞くだけの人形になってしまったのだから。

日々の世界

次の日、新川学園体育館。

「えー、今回の件では皆様の心に大きな傷を――」

髪はあれど威厳はないまだ若き校長が、壇上に立って昨日起こった事件に関して話をしている。

周囲を見渡しても、生徒の数がいつもよりは少ない、ショックかどうかは知らないが、休んでいる生徒がいるんだろう。

今朝起きた時、俺の携帯は壊れたままだったので、いつから学校が始まるのはわからない。

確認するのも面倒なので俺も登校する気はなかったのだが、しかし、律儀にも島崎の野郎が家まで迎えに来やがったため、こうして、登校する羽目になった。

と、そこで、壇上に変化が起きる。

「そこで、我が校にカウンセリングの先生をお招きすることにしました。若原先生です」

そう紹介されると、壇上へと上がる謎の男。

まだ若い男だ、服装はスーツでやり手の社長のような風貌があり、その表情には人を安心させるような笑みが張り付けてある。

「若原です。先日の方は生徒の皆様の心に多大な影響を与えてしまったと思います。私も少しでも、皆様の助けになればと思いやってきました。どんな些細なことでも構いません、不安があったり、心がつらいと思ったら、私のところに来てください。死力を尽くさせてもらいます」

そう言って、頭を下げる若原。と、後ろに立っていた三宅が俺の背中を叩く。

「何だ？」

「あの若原先生って、カウンセラーとしては結構、有名な先生らしいよ」

「へえ、そうなのか」

「うん、大手の社長さんに専属で雇われているくらいだって」

「何で、そんな奴が、この学校に？」

「さあ？　でも、あの人、ボランティア精神は満点みたいだよ？

カウンセリングで儲けたお金で、国内、海外問わずに、募金しているみたいだし。ほら、この中心で新しいメディカルタワーが建設されてるじゃない、あれにも、多大な資金を投資しているらしいし。これも、その一環じゃない？」

「ああ、あの変な形の建物か」

そのメディカルタワー建設の話なら聞いたことがある、数ヶ月前からハイペースで造られていつているあの建物、完成図を何かのニュースで見た気がするが、かなり特異な形だったのを覚えている。

「しかし、よく知っているな」

「朝に、女の子達から聞いたんだよ。結構、女性からの人気も高いんだってさ」

「ふん、ライバル登場か？」

「まさか、この学校の女子は全ての物だよ」

しれっと笑顔でそんなたわ言を漏らした三宅が、その更に後ろにいた島崎によってバックチョークをされたのは、まあ、自業自得だろう。

三時限目が終了した後、俺は何となく、屋上に来ていた。

事件後ということで、今日の授業は昼までには終わるらしいが、

屋上の風を受けていると次の授業を受ける気が起きない、このまま、サボってしまおうか。

そんなことを考えていると、

「あー！　見つけた！」

どこか、ムスツとした表情の小原さくらが屋上の入り口からこちらを見て声を上げる。

「何だ？　何か用か？」

「何か用か？　じゃないよ！　携帯に連絡いれたのに、どうして、無視するの？」

携帯、どうやら、小原は連絡をしてきたようだが、俺の携帯は、「携帯？　ああ、逆パカしちまってな」

「逆パカ？」

何故、そんなことに？　と、小原が首を傾げている。

さすがに自分でしたと言うわけにもいかず、ただ、別のことを言おうにも、逆パカになる状況が思い付かない。

そのまま、黙っていると、

「もしかして、いじめられてるとか？」

変な誤解をした様子の小原が訊いてきた。

「俺が？」

「うん、ほら、多賀谷君が人形好きでオタクなのは、結構、広まってるし。いじめられてるのかなーって」

まあ、確かに、学校内でからまれたことなら何度かあるが、昔は甲崎と一緒に返り討ちにしてやったのを覚えている。それでも、多少は腕に覚えがある。

どこをどうすれば、人間が壊れるか、肉体的にも、精神的にも、それをコツとして掴んでいるため、力はないが圧倒的に実力差がない限りはそこそこどうにかなる。

「ふん、まさか。それに、俺がいじめられていたらどうなんだよ？」
助けてでもくれるのか？　と俺は笑った。

島崎や三宅のように男子間で元々孤立している奴ならともかく、普通の奴は俺のように孤立して疎んじられている奴とは関わらない、何故なら、それが原因で自分も孤立してしまうからだ。

それが、女子ともなれば、さらに、その傾向が強くなる、俺への女子の評判は空気のような扱いだろうが、俺に関わる女子がいれば、他の女子連中はその女子を同じく変人扱いするだろう。
なのに、

「助けるよ！　助けるに決まってるじゃん！」

小原は真剣な表情で肯定する。

ここまでくるとお人好しというよりも馬鹿だな。こいつは屋上でよくサボっているから真面目な委員長って感じでもない。

友達がいけない風には見えないし、校舎内で他の女子生徒と話しているのを見かけたこともある、こいつからすれば、俺との関わり合いは人が来るのが少ない屋上くらいにしておくのがいいのだ。

「はいはい、お気持ちだけ受け取っておくよ。それに、いじめられてなんかないって言ってるだろ」

「へえ、じゃあ、どうして、携帯がそんなことに？」

「それは、開いたままポケットに入れていて、うっかり座っちゃまったんだよ」

あまりに胡散臭い言い訳に、心の中で自分を罵倒する。こんなバレバレな嘘なら、出来心でやってみたくなつたと言った方がまだよかった。

「ああ、あるよね」

だが、それに同意する小原、いや、今のはさすがにないだろう。こいつは、もしかしたら、いや、もしかしくても馬鹿なんじゃ。

俺がそんなことを考えているとはつゆ知らず、小原が質問の眼差しをこちらに向ける。

「じゃあ、今は携帯電話がないんだ？」

「あん？ まあな。また、買いに行かないと」

あっても使わないように思えて、ないと不便なのが携帯電話だ。

しかし、面倒だな、と頭を掻いていると、

「そ、それならさ、今日一緒に行かない？ 授業も途中までで終わるんだしさ」

「今日？」

急だな、それに、

「何で、お前と一緒に行かなくやいけないんだよ」

「え？ その、私も買いたい物があるし、もののついでだよ、いいでしょ？」

「まあ、別にいいけどよ」

「ほ、ホント？」

「はあ？ 嘘言ってどうするんだよ」

「あはは、そうだね。じゃあ、約束、約束だからね」

「わかったよ」

俺が答えると、小原は嬉しそうに微笑んだ。別に喜ばれるようなことをした覚えはないのだが、と何気なく、屋上から下を覗くと、

「うん？　ありゃあ」

ここからでも見える中庭、黒髪の女子生徒、二宮亜里砂の姿。いつものようにその表情に感情の色はない。

と、その隣に、誰がいる。若い教師のようにも見えるが、誰だったか？

「あ、若原先生だね」

「ああ、そうだ。そいつだ。それにしても、意外だな。二宮が真っ先に若原に相談するとは思わなかった」

人形委員長なんて言われても、悩みはあるのかね？　と黙っていると、

「ああ、あの二人、知り合いみたいだよ？」

「そう、なのか？」

「うん、二宮さんって、孤児院の出身なんだけど、その孤児院の経営を手助けしていたのが若原さんなんだよ」

そう言えば、三宅が多額の資金を色々と募金していると言っていたな。それも、その一つというわけか。

「そんなことよく知っているな」

「ふふん、何を隠そう、私はその孤児院でアルバイトをしているのだ」

「アルバイト？」

「うん、将来、そういう仕事に就きたいなって。一週間に一回くらいのペースだけど、千葉だから電車で通わなきゃいけないからね、で、偶然、その出身者に二宮さんがいるって知ったんだ」

「ふうん、そっか……」

二宮は孤児出身だったのか……幼馴染なのに、よく知らない、いや、覚えていない。

ズキッと脳が痛み、俺は片手で頭を押さえた。昔の記憶を思い出そうとするといつもこうだ。

俺には、親戚に預けられるよりも前の記憶がない、かすかに覚えてはいるが、完全には思い出せない。

しかし、あの二人、何を話しているのか、二宮の方は相も変わらずの無表情だが、若原の方は微笑んでいる。

「うわわ、あの二人、何か怪しくない？」

そういう話はよくわからない、そのまま、ぼんやりと二人を眺めていると、ふいに、二宮の方がこちらを振り向いた。

目が合う、何か気まずい。二宮はこちらを見て、しばし、固まっていたが、やがて、立ち上がって中庭から出ていった。

話の最中だったのか、若原は首を傾げて、その後を追っていく。

「どうしたんだろ？」

「さあ？」

言って、俺もそのまま、校舎内へと向かっていく。

「あれ？ 授業、サボらないの？」

「そのつもりだったけど、気が変わった」

「ふーん、約束、忘れないでね！」

わかっているよ、と手をひらひら振りながら答えて、俺は屋上を後にする。

ズキッと、また、頭が痛む。

おかしい、アナザーに目覚めてからはやけに痛みが激しい。

日々の世界2

授業が終わり、俺は鞆を肩に担いで教室を出た。

そのまま、校門へ向かうと、

「お、来たね」

ニツと笑い、校門で座っていた黒髪ショートカットの少女、小原さくらが鞆を抱えて立ち上がる。

「よし、そんじゃ、いこっか!」

「……さっさと行くぞ」

俺は無視して、その横を素通りした。

「うわっ、ノリ悪ッ! おー、くらい言ってくれてもいいじゃん」
やれやれだ、と頭を掻きため息を吐く。

その俺の行動を見て、ムツと小原が眉をひそめ、そして、勢いよく俺の顔に向かって人差し指を向ける。

「女の子に対して、そういう態度は駄目だよ」

「お前には関係ないだろ」

「うわっ、またそういうこと言う」

「文句ばかり言っていると、置いていくぞ?」

「うわわ、ちょっと、待ってよ!」

慌てて後から追ってくる小原、しばらく沈黙のまま、歩いていると、

「そういえばさ、シンパチ君って、一人暮らし?」

いつもの質問タイムが始まってしまった。

「あん? そうだが」

「ふーん、それっぽいよね。ご両親は?」

「いないな、小さい頃に母親が死んで、それからは親戚の家だ。親父のことも知らない」

「え、ご、ごめん、知らなかったから」

屋上で出会ってからあれだけ質問されて、まだ、こいつにも知ら

ないことがあったのか、「気にするな、どうしても、いいことさ」

「ど、どうしてもよくなんてないよ」

「どうでもいいんだよ、母親のことなんて、覚えてないし」

「覚えてない？」

「記憶喪失、って言ったらいいのかな？ 親戚の家に預けられる前

のことはほとんど覚えてないんだ」

「そっか、でも、お母さんがいないなんて悲しいね」

悲しい……そうなのだろうか？

この話を俺は滅多に他人にはしない、生ぬるい同情がかんに障るからだ。

それに、俺はそのことに関して一度たりとも、悲しいなんて思ったことはない。

だって、きっと、

「どうか——」

俺の返しに、小原が首を傾げる。

「俺は——母親に愛されていなかったんだろうさ」

母親は、俺のことなど愛していなかった。

でなければ、あんなことするはずが——

（あんなこと？）

自分で自分の思考に疑問を覚えた。

あんなこととは何だ？

ズキッと頭が痛む、顔も覚えていない母親、そもそも、愛されていたかも知れないのに。

なのに、

気づけば、俺は何気なく頭上にある太陽を掴むように手を伸ばしていた。

眩しかったわけじゃない、何気なく、俺はその手を伸ばしていた、別に太陽を掴もうとしていたわけじゃない、見えざる誰かに向かって伸ばした手。

誰かが、その手を掴んでくれるような気がして、

それが、母親なのか、それとも、どこかに置いてきた何かなのは知らないけれど。

馬鹿らしい、と思いながら俺は手を下ろす、だが、その途中、

「愛されていないとか、悲しいこと言わないでよ」

小原が俺のその手を胸に抱くようにして掴んだ、わずかな温もりが手に染みついて、小原は俺に微笑みかける。

「何――」

やってんだ、と言う暇もなく、小原は透き通った純粋な目で俺の目を見つめてくる。

「もしも、君のお母さんが君を愛していなくても、その分も君を愛してくれる人がいたはずだよ。ううん、きつというよ」

聞いている方が恥ずかしくなるような台詞を吐いて、小原が俺の手を引いた。

「さあ、行こう」

振り払うのも面倒で、俺は小原の手が引く方へと付いていく。

その先には、何があるのだろうか？

いや、携帯ショップなんだけれども。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4244f/>

ANOTHER WORLD X

2011年1月6日02時14分発行